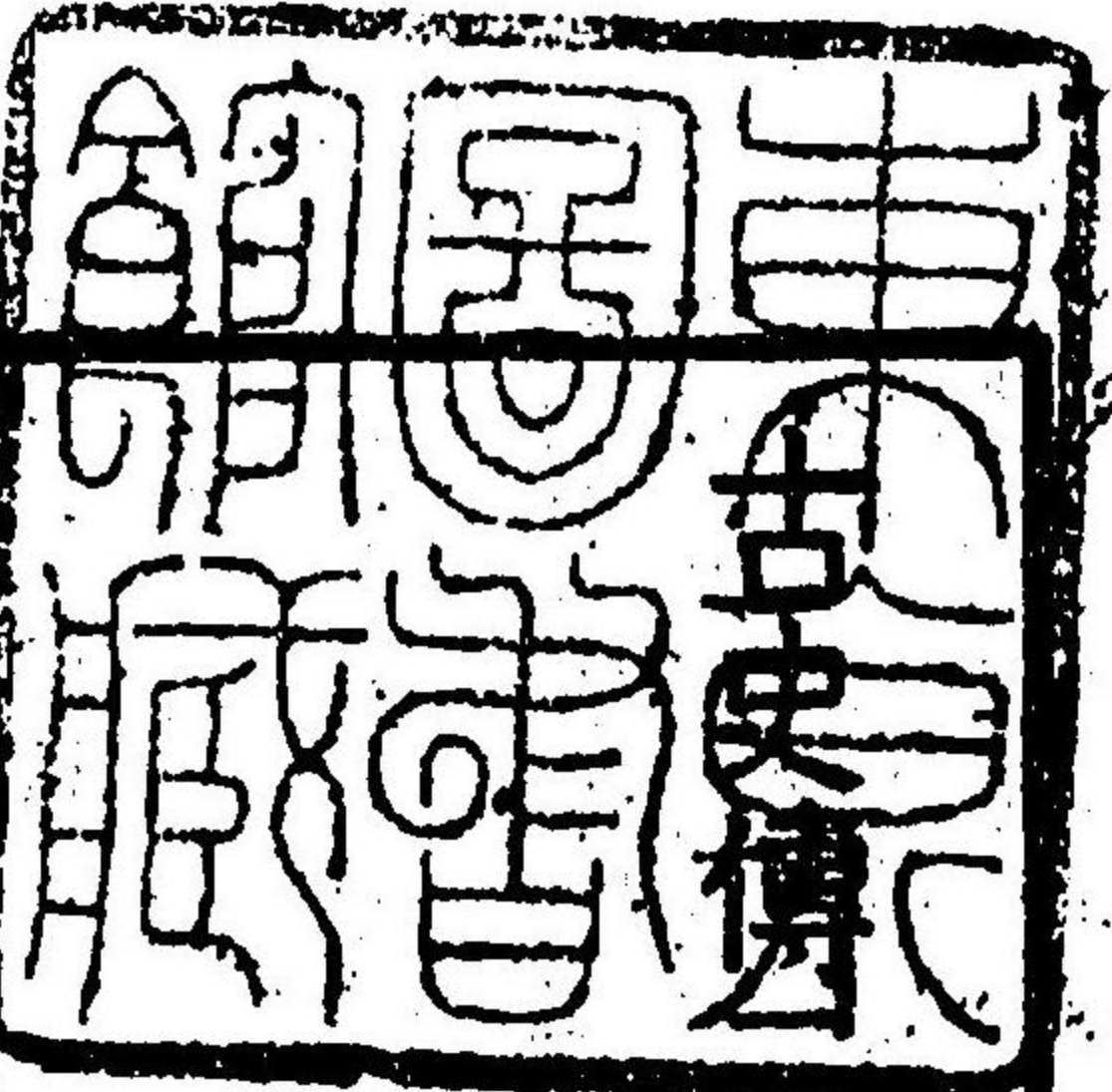


東 京 國 立 書 館			和 書 門
一 七	一 六	二 八	
冊	號	架	函

古史傳
自第六十九卷
至第七十卷
二十

128
36
3



二十出卷

平篤胤謹撰

男 鐵胤
孫 延胤

續攷

神代中十二出卷

九十九

爾大因主神出嫡后須勢理毘

賣命甚為嫉妒矣故其日子遲

神和備而自出雲將上坐倭因

シテヨソホヒタ、ストキニカタ 而東裝立時。片御手繫御馬出。
クラニカタミ 鞍片御足踏入其御燈而歌曰。
ヌバタマノク 奴婆多麻能久路伎美祁斯遠。
マツブサニト 麻都夫佐爾登理與曾比。淤伎
ツトリムナミル 都登理牟那美流登伎波多多
キハタタ

ギモコレハフサハズヘツナ 藝母許禮波布佐波受幣都那
ミソニヌギウテソニド 美曾邇奴岐宇氏蘇邇杼理能。
アラキミケシラマツブサニ 阿遠伎美祁斯遠麻都夫佐邇。
トリヨソヒオキツトリムナ 登理與曾比淤伎都登理牟那
ミルトトキハタタギモコモフ 美流登伎波多多藝母許母布

佐波受幣都那美曾邇奴棄宇
氏夜麻賀多爾麻岐斯阿多泥
都伎曾米紀賀斯流邇斯米許
呂母遠麻都夫佐邇登理與曾
比淤伎都登理牟那美流登伎

波多多藝母許斯與呂志伊刀
古夜能伊毛能美許等牟良登
理能和賀牟禮伊那婆比氣登
理能和賀比氣伊那婆那迦士
登波那波伊布登母夜麻登能

比登母登須須伎宇那加夫斯。
 那賀那加佐麻久阿佐阿米能。
 佐疑理邇多多牟敘和加久佐
 能都麻能美許登許登能加多
 理碁登母許遠婆爾其後取大

御酒坏而立依指舉而歌曰夜
 知富許能加微能美許登夜阿
 賀淤富久邇奴斯許曾波遠邇
 伊麻世婆宇知微流斯麻能佐
 伎邪伎加伎微流伊蘇能佐伎

淤カ知チ受ズ和ワ加カ久ク佐サ能ノ都ツ麻マ母モ多タ
勢セ良ラ米メ阿ア波ハ母モ與ヨ賣メ邇ニ斯シ阿ア禮レ
婆バ那ナ遠ヲ伎キ氏テ遠ヲ波ハ那ナ志シ那ナ遠ヲ伎キ
氏テ都ツ麻マ波ハ那ナ斯シ阿ア夜ヤ加カ伎キ能ノ布フ
波ハ夜ヤ賀ガ斯シ多タ爾ニ牟ム斯シ夫ブ須ス麻マ爾ニ

古コ夜ヤ賀ガ斯シ多タ爾ニ多タ久ク夫フ須ス麻マ佐サ
夜ヤ具グ賀ガ斯シ多タ爾ニ阿ア和ワ由ユ伎キ能ノ和ワ
加カ夜ヤ流ル牟ム泥ネ遠ヲ多タ久ク豆ヅ怒ヌ能ノ斯シ
路ロ伎キ多タ陀ダ牟ム伎キ曾ソ陀ダ多タ伎キ多タ多タ
伎キ麻マ那ナ賀ガ理リ麻マ多タ麻マ傳デ多タ麻マ傳デ

佐斯麻伎。毛毛那賀邇。伊遠斯
那世。登與美伎。多氏麻都良世。
夜知富許能。加微能美許登許。
登能迦多理碁登母。許遠婆。如
此歌而。即爲宇伎由比而。宇那

賀氣理而。至今鎮坐也。此謂神

語歌也。

嫡后也。師云意富岐佐伎と訓ばし。上小嫡妻とあるは御
父神の御言ある故也。此之後も語傳ふるぞて此言あ
ゆ故よ。尊みて如此云ゆ。凡て伎佐伎と云。天皇の大御妻
小限にて申は御稱あゆ。但し倭建命此御妻橘比賣命
也。此よも如此あるは。出雲風土記も赤衾伊農意保須美
比古佐和氣能命之后。天懸津日女命。今云。此事は第七十

はと阿遲須枳高日子命之后。天御梶日女命。今云、おを下
第百三段よ

見えあど有レを合せて思レ予レば。古神とちをば。天皇小準子

尊みて、皇神スメガミをも申せる類よて。其御妻ミメをも后キサキと申せる

あゆレばし。続後紀九ふも、伊豆、国賀茂、郡阿波、神是、三島、大

社、本后也、神名式よも、安房、国安房、郡安房、坐、神

社の次、后神大比理、刀咩、命、神社あり。はて神名式よ。出雲

是を続後紀ふレて、第一、后神とあり。はて神名式よ。出雲

国出雲郡杵築大社の次よ。同社大神、天后神社とありは。

即此須世理毘賣命を祭れるよて。天后と申せゆレを疑

あし。此の嫡后を師は美賣と訓まレるを、后を天皇の

御嫡妻あらでを申し難しを、固く心得らまレとゆも

はみて、そを中はて天皇の伎佐伎と申レむ。皇后小限

らレば。上代よは、妃夫人あど此班までを申せる稱あレす。其

中ふて。最上モトモカミある一柱を。天后と申せレす。此後世の皇后あ

す。此事コトを。白檮原宮段シロキナノミヤノイハふ委レく辨レへ云レばし。今云、其処此

まば此の嫡后も。其コノよ準カザリ予レて。意富岐佐伎と訓レばきあレと。

彼神名式と照テラして愈明イヨミカキらし。○甚為嫉妒矣シカニシテ。伊多イタ久ク宇ウ

波那理ハナリ泥陀美志ネタミシ給伎タマヒキと訓レばし。舒明天皇紀よ一尼嫉

波那理ハナリのあレどレ。白檮原宮段シロキナノミヤノイハよ出シ。今云、戊午、歳八

段ノも。其、大后石之日賣命オホノミタマヒメノヒメノミコト。甚多嫉妬シカニシテとあレす。はて此コノを必

しめ。上カミ此沼河比賣ニハヤヒメみふを係カケて見レばレらレば。彼カとは別ワカ

段ノあレれレ。總スベテての上を云レあレゆ。彼、八上比賣の、此、嫡后を畏

も思ふ○日子遲ヒココヂを。夫妻メウヂはレうレ予レ此事コトを云レふ時トキふ。其夫を

指て云稱と聞也。ハ千示神の一、名と心得るを非あり。下ふ豊玉毘賣命の御歌也。御答歌を擧とて、其御夫火遠理命也。御事をも如此申せ也。儲此稱の意也。上阿斯訶備比古遲神也。今云第二段也。傳見べし。お云る如、あまは。夫を云も。今世也。賤者の言ふ。夫を意夜遅と云せ同意あるべし。○和備而也。万葉四よ。物思跡和備居時二。まと丈夫之思和備乍。まと遠有者和備而毛有乎。あま。猶いと多り也。爲方あくはし。迫りと依意あ也。光仁天皇紀よ。藤原永手大臣を悼賜する詔ふ。言牟須倍母無爲牟須倍母不知爾悔備賜比和備賜比。と何依よても知べし。倭姫命世記よ。宮処。眞侘賜比。天其処乎。和比野止号支。○自出雲也。は。

上の高志因沼河比賣の事と也。連て見也。疑ひ有べし。まど。此を別段あまむ彼ふを拘えらば。○將上坐倭因。而因はしも多れりよ。遠き倭よし。せ行坐むとあ。く。倭ハ當昔と也。既に。他因。小殊ある。深き由縁あ也。けむし。和御魂を其因の大御和山。鎮坐せ。上とは。鄙よめ。京行を云あ賜ふまも。思ひ合はべし。○れ也。此を皇都。爲て。此後の言を以。語傳す。とる也。○東装之時。下よ。將降裝束之間。朝倉宮段。小裝束之狀。雄畧天皇紀。小裝束已畢。進軍門云。万葉二よ。皇子之御門乎。神宮爾裝束奉而あど見也。あまらふ。準乎。て。此の東装。下上よ。誤れるよ。や。と思はるまと。神功皇后紀。一云。訓を下也。歌。伎美賀余曾比。万葉十の文よも。如此あり。

しき色ある故に、少くも有せむとて、後より青みを加へ、
漆物なり。故に青鈍、あど云名もあり、まに青花に墨を入り、
漆と云へるも同じ。あまらば皆後の事にて、本を多く、墨
深あり。服假間事と云ふ物に、著服者、可用、鼠色、其色或、墨
許、漆之、或、墨、入、はと、持統天皇、紀七年正月、詔ふ、令天下、百
姓、服、黄色、衣、奴、卑、色、と見え、衣服、令、家人、奴婢、椽、墨、衣、と
定られ、は、右に、鼠色、ある、は、此、御、制、ハ、此、後、の、
御、制、ハ、此、後、の、右も、右の色を、賤
しめ、懸とるべし。けして、眞墨、は、貴人も、常、著とる。う。
せめ、云、は、れ、ど、上代、と、り、中昔、は、で、ぬ、黒衣、を、著、ぬ、は、
と物、不見え、ぬ。中昔の書ども、衣服、此事、云、ぬ、黒
他の色、は、黒、み、て、見、ぬ、お、と、不、て、宋、に、黒色、ある、は、非
突、源、氏、若、菜、下、巻、よ、お、お、ひ、ぬ、ぬ、黒、き、う、牙、の、衣、と、
る、類、お、當、時、黒、袍、を、無、れ、ぬ、此、も、紫色、の、い、と、く、黒、み、と、る、を、う、く、云、彼、鈍、色、お、は、ら、で

眞黒あるをも人、は、賤し、ぬ。好ざ、と、し、と見、と、四、位
上、紫袍、を、改、ぬ、て、黒色、よ、あ、れ、る、は、い、ぬ、後、の、お、と、お、斯
て、今、世、人、の、黒色、を、し、も、好、む、ぬ、黒袍、を、尚、ば、移、
れる、人、さ、れ、ぬ、今、此、に、黒御衣、と、ある、は、此、を、不、宜、と、移、
情、あり、は、こ、せ、残、云、む、ぬ、米、お、先、故、お、好、ぬ、し、から、ぬ、色、を、と、み、給
牙、る、お、諸、次、よ、青、衣、を、云、ひ、て、其、を、も、棄、その、次、よ、緋、色
を、云、ひ、て、此、ぞ、宜、き、と、と、み、給、牙、後、の、
御、く、世、の、服、色、は、御、制、此、次、第、と、も、合、る、を、や、御、制、の、次、
第、大、抵、から、因、の、隋、唐、の、制、よ、お、ら、へ、漆物、あ、れ、ぬ、も、上、
代、と、り、も、お、は、ら、ぬ、う、ら、人、は、尚、み、好、む、色、と、卑、し、め、惡、む、色
と、の、次、第、を、然、あり、て、此、方、も、彼、處、も、似、と、り、ぬ、む、ま、と、彼
因、此、古、お、代、ご、と、よ、各、尚、む、色、は、有、し、ぬ、強、て、定、め、し、け、
あ、ら、お、と、あ、ま、ぬ、そ、ハ、○麻、都、夫、佐、爾、ハ、眞、具、お、都、夫、佐
中、く、う、云、よ、足、ら、ぬ、

とは落オツるおとれく。調トウへ備ソノふるを云ふ。○登理與曾比ト。取装トリヨシあト。○淤伎都登理オキトリと。奥鳥オキトリふト。海川ウミカハふまき。池イケあト。おまれ。水上ウミノお浮居ウキる鳥トリを云ト。水鳥ウミトリおとあト。奥オキせト。おト。奥鳥オキトリ鴨カモともあト。万葉六マンヤク。奥鳥オキトリ味經アジノ乃ノ。原ハラともおト。けト。あト。味鴨アジノせト。云ト。○牟那美流登伎ムナミリウトウキハ。胸見ムネミ時トキあト。水鳥ウミトリハ。頸ネを延居ノビて己オンが胸ムネを見るミ。如ニくはる物モノあト。るおト。譬タトヘへて云ト。あト。○波多ハタく藝母ゲボと。鰭揚ヒナギもあト。波多ハタと。中昔ナカノコトの物語書モノガタリハ。袖ソデ之波多ハタまト。波多ハタ袖ソデハ。と有ト。袖ソデハ。端ハシお方カタを云ト。予ヨめ。魚イサハ。鰭ヒナギ。この字ジハ。背上セノ鬣ハシ也ト。注ツしト。云ト。礼レを本ホよテ。はト。俗言ソコトコトハ。物モノハ。邊側ヘリカタを。波多ハタと云ト。も同意トウイあト。云ト。あるべし。

ハ。多藝タゲハ。万葉二マンヤクニ。多氣婆タゲバ奴禮ヌレ多香根タカネ者長寸妹之髮ナガサツメノカミ。九ク。おト。髮カミ多タ久ク麻庭爾マニニ。十四シヨウ。古麻波多具等毛コマハタツギトウモ。十九ジュウク。馬太ウマタ伎ギ。由吉ユキ氏ウヂ。櫛シもト。てカ。くケ。げゲ。櫛シ島浪シマナミ間マをリ見ミ也ト。あト。どあト。る言コトハ。てト。ぬト。ぐト。揚アゲるを云ト。ふト。馬太具ウマタツグとト。手綱テヅナをト。ぐト。めト。りト。ちト。まト。むト。此コノハ。左ヒダリ右ミダリハ。手テ残張ノコシ也ト。袖ソデ多タぬト。ぐト。揚アゲて。加カハ。水鳥ウミトリの胸見ムネミ。る如ニくおト。あト。て。吾ワガ著装キヨウとト。る衣キを。好ヨクしト。やト。悪アクしト。やト。と見ミるを云ト。あト。ハ。今イマ世セハ。人ヒトも。新衣アタラシキキハ。ど初ハジメ免メて著キヨウとト。は時トキハ。必カナラ然シ爲シて見ミるもト。れト。ぞ。○許禮波布佐波受コトレハフサハスハ。此コノ者モノ不フ宜サ也ト。此コノ言コトハ。上ウヘの不良フシヤクハ。訓ツケを論ロへる處トコロハ。云ト。ふト。ぐト。如ニく。今イマ云ト。第六ダイロク投ナゲハ。宜ヨクしト。からト。びト。と棄スラふ意イハ。也ト。俗ソコハ。氣キハ。入イるト。然シとト。いト。ふ意イハ。也ト。氣キハ。入イるト。あト。をト。布佐比フサヒの

方と源氏物語
み見えとり。○幣都那美曾邇奴岐宇氏は於邊浪磯脱

棄あす。と師説あす。を直浪磯とてを言あす。あそ云べき

とまぎぞ万葉よ。白浪乃濱松之枝あぞと絶るも同格りて
那美え那岐の反あて。もとは浪此立さ己ぐを云名ある
こと。上類那藝類那美神の処よ云へ依如くあまバ那美
曾あて。即波此立さ己ぐ磯と云ふ意あり。土佐日記の哥
ふ風あると浪のいそよを囀も春あえあ。ちて棄を宇氏
ら熱花のみぞさく。是も浪乃いそと詠り。

と云は。御誓段ふ。吹棄とある。我も神代紀ふ。此云浮枳于

都屢せ見えとり。落窪物語ふめ。逐棄むと云こぞを。淤比

宇氏牟とあす。後世定家卿の哥よも。禊安る麻の立葉を

和物語よ。布都せも云へ。此そふぬぎりてを。○蘇
契沖が鳩織打而ありと云。予るをいそく誤まゆ。

邇邇理能ハ。鳩鳥之ふて。青枕言あす。其は和名抄ふ。爾

雅集註云。鳩小鳥也。色青翠而食魚。江東呼爲水狗。和名曾

比。文徳天皇紀用。魚虎鳥。やあす。其色殊よ青翠なれむ

あす。鳩字を寫誤れ依あらむ。けり天若日子段ふ翠鳥と

の依も。書紀ふむ。鳩とあまむ。此鳥あす。あは今世よ川世

美と云物よ。堪囊抄ふ。少微と云。曾比。少微世美あ

ぞむ。みあ蘇爾の訛れるあす。綠色を云も。翠鳥色は曾を

省々依あるべし。○許母布佐波受た。此亦不宜あす。○夜

麻賀多爾た。山縣よあす。但此た地名よは非だ。あま山の

縣あす。地名あるも。本。○麻岐斯は。求しあす。まときし

むうと師の云まある。三言れ句あす。○阿多尼都伎ハ。茜

春^{ツキ}うと契^{ツキ}沖^{ツキ}云^{ツキ}予^{ツキ}め。信^{ツキ}ふ然^{ツキ}聞^{ツキ}也^{ツキ}。赤^{ツキ}根^{ツキ}を阿^{ツキ}多^{ツキ}尼^{ツキ}と云^{ツキ}
むあやえ。聊^{ツキ}心^{ツキ}め^{ツキ}う^{ツキ}べ^{ツキ}。若^{ツキ}ハ草^{ツキ}書^{ツキ}と^{ツキ}正^{ツキ}誤^{ツキ}ま^{ツキ}る^{ツキ}う。かき書るを多と誤
れ^{ツキ}る^{ツキ}ふ^{ツキ}や。和^{ツキ}名^{ツキ}抄^{ツキ}染^{ツキ}色^{ツキ}具^{ツキ}よ。兼^{ツキ}名^{ツキ}苑^{ツキ}注^{ツキ}云^{ツキ}。茜^{ツキ}可^{ツキ}以^{ツキ}染^{ツキ}緋^{ツキ}者^{ツキ}也^{ツキ}。
和^{ツキ}名^{ツキ}阿^{ツキ}加^{ツキ}禰^{ツキ}と見^{ツキ}え。縫^{ツキ}殿^{ツキ}寮^{ツキ}式^{ツキ}。雜^{ツキ}染^{ツキ}用^{ツキ}度^{ツキ}中^{ツキ}よ。淡^{ツキ}緋^{ツキ}綾^{ツキ}一^{ツキ}疋^{ツキ}。
茜^{ツキ}大^{ツキ}四^{ツキ}十^{ツキ}斤^{ツキ}。紫^{ツキ}草^{ツキ}卅^{ツキ}斤^{ツキ}云^{ツキ}く^{ツキ}と見^{ツキ}也^{ツキ}。か^{ツキ}く^{ツキ}ま^{ツキ}だ^{ツキ}。此^{ツキ}も緋^{ツキ}色^{ツキ}を
染^{ツキ}る^{ツキ}ふ^{ツキ}染^{ツキ}べ^{ツキ}し。○曾^{ツキ}米^{ツキ}紀^{ツキ}賀^{ツキ}斯^{ツキ}流^{ツキ}邇^{ツキ}ハ。染^{ツキ}木^{ツキ}之^{ツキ}汁^{ツキ}ふ^{ツキ}あ^{ツキ}正^{ツキ}。染^{ツキ}
木^{ツキ}と^{ツキ}え。即^{ツキ}上^{ツキ}此^{ツキ}茜^{ツキ}よ^{ツキ}て。其^{ツキ}を搗^{ツキ}と^{ツキ}る^{ツキ}汁^{ツキ}ふ^{ツキ}と^{ツキ}云^{ツキ}あ^{ツキ}り。儲^{ツキ}茜^{ツキ}ハ
草^{ツキ}あ^{ツキ}染^{ツキ}字^{ツキ}。木^{ツキ}と^{ツキ}云^{ツキ}る^{ツキ}也^{ツキ}。物^{ツキ}染^{ツキ}る^{ツキ}よ^{ツキ}え。今^{ツキ}世^{ツキ}よ^{ツキ}木^{ツキ}草^{ツキ}と^{ツキ}も^{ツキ}ふ。凡^{ツキ}
ては染^{ツキ}草^{ツキ}を^{ツキ}云^{ツキ}如^{ツキ}く。古^{ツキ}は草^{ツキ}を^{ツキ}も^{ツキ}凡^{ツキ}て染^{ツキ}木^{ツキ}を^{ツキ}云^{ツキ}え^{ツキ}り。契沖を木と云むこといかにあまむ。若く阿多尼を皮を剥て染物染る木名よて。其を染木と云るふやとも云予り。○

今^{ツキ}云^{ツキ}内^{ツキ}山^{ツキ}真^{ツキ}竜^{ツキ}ガ。出^{ツキ}雲^{ツキ}風^{ツキ}土^{ツキ}記^{ツキ}解^{ツキ}ふ。此^{ツキ}の曾^{ツキ}米^{ツキ}紀^{ツキ}を。鳥^{ツキ}草^{ツキ}樹^{ツキ}
ありと云^{ツキ}る^{ツキ}也^{ツキ}。詳^{ツキ}あ^{ツキ}ら^{ツキ}ぬ^{ツキ}説^{ツキ}あ^{ツキ}が^{ツキ}ら^{ツキ}由^{ツキ}有^{ツキ}げ^{ツキ}あり。第^{ツキ}七^{ツキ}十^{ツキ}三^{ツキ}
段^{ツキ}佐^{ツキ}世^{ツキ}木^{ツキ}の^{ツキ}外^{ツキ}。又^{ツキ}ハ木^{ツキ}と^{ツキ}云^{ツキ}は。本^{ツキ}を植^{ツキ}物^{ツキ}此^{ツキ}總^{ツキ}名^{ツキ}ふ^{ツキ}て。草^{ツキ}よ
め^{ツキ}あ^{ツキ}正^{ツキ}也^{ツキ}の。波岐平岐須く岐余母岐布く岐あど草あも。伎と云名の多るる也。木と云あまや。
○斯^{ツキ}米^{ツキ}許^{ツキ}呂^{ツキ}母^{ツキ}遠^{ツキ}ハ。染^{ツキ}衣^{ツキ}を^{ツキ}外^{ツキ}正^{ツキ}。斯^{ツキ}米^{ツキ}と^{ツキ}曾^{ツキ}米^{ツキ}を^{ツキ}あ^{ツキ}る^{ツキ}同^{ツキ}言^{ツキ}
ぞ。○許^{ツキ}斯^{ツキ}與^{ツキ}呂^{ツキ}志^{ツキ}は。此^{ツキ}宜^{ツキ}ふ^{ツキ}て。斯^{ツキ}を助^{ツキ}辭^{ツキ}あ^{ツキ}正^{ツキ}。与呂志てふ言の意を万
葉^{ツキ}考^{ツキ}よ。け^{ツキ}て首^{ツキ}と^{ツキ}正^{ツキ}此^{ツキ}ま^{ツキ}で^{ツキ}此^{ツキ}意^{ツキ}を括^{ツキ}て^{ツキ}云^{ツキ}は^{ツキ}ぐ。今^{ツキ}倭^{ツキ}国^{ツキ}ふ
物^{ツキ}染^{ツキ}染^{ツキ}装^{ツキ}ふ。色^{ツキ}く^{ツキ}此^{ツキ}衣^{ツキ}を^{ツキ}取^{ツキ}著^{ツキ}て。あ^{ツキ}く^{ツキ}染^{ツキ}む^{ツキ}る^{ツキ}よ。茜^{ツキ}ふ^{ツキ}染^{ツキ}と
染^{ツキ}緋^{ツキ}衣^{ツキ}。此^{ツキ}ぞ^{ツキ}心^{ツキ}よ^{ツキ}か^{ツキ}あ^{ツキ}ひ^{ツキ}多^{ツキ}宜^{ツキ}き^{ツキ}と^{ツキ}詠^{ツキ}給^{ツキ}ふ^{ツキ}あ^{ツキ}り。上ふ束装とある。即
此^{ツキ}緋^{ツキ}衣^{ツキ}を^{ツキ}著^{ツキ}給^{ツキ}。儲^{ツキ}か^{ツキ}く^{ツキ}装^{ツキ}束^{ツキ}も^{ツキ}宜^{ツキ}し^{ツキ}れ^{ツキ}だ。今^{ツキ}は^{ツキ}せ^{ツキ}て^{ツキ}出^{ツキ}發^{ツキ}
あ^{ツキ}む^{ツキ}と^{ツキ}び^{ツキ}を^{ツキ}云^{ツキ}意^{ツキ}。言^{ツキ}外^{ツキ}ふ^{ツキ}こ^{ツキ}め^{ツキ}ま^{ツキ}正^{ツキ}。○伊^{ツキ}刀^{ツキ}古^{ツキ}夜^{ツキ}能^{ツキ}也^{ツキ}。妹^{ツキ}を

云む枕言と聞えと云。伊刀古とは人を深く親睦む稱ふ
て。伊刀富志伎子てふこと也。古字を子の假字よ。万葉
十六ふ。伊刀古名兄乃君居く而。物爾伊行跡波云く。八重
疊平郡乃山爾。此古字を今本よ。布流伎と訓とれどいせ
此をふるきと云。せほ依え。八重疊まで。平郡を云む序
あるが。居く而云くを思ふ。年久志く同居せ依者
此状あまぞ。名兄とを。妻此夫を云ふはまよ詠る語也。
然まバ夫を親睦しみて。伊刀古と云す。はと神樂歌篠
波ふ。見之禰川久乎見名乃與佐く也。曾禮毛加毛。加禮毛
加毛。伊止己世仁。万伊止古世仁世牟也。御稻舂女之美乎
其哉彼哉あり。伊

止己世の世を心得。せほ依え。妻ふせむと云意と聞え。風
ぎ下あるも同じ。俗良く歌よ。伊止古世乃。加止仁。天宇止乎比佐介天を何
るも。親睦しくひる人の門ふ。調度を提てと云あせ也。
此等と彼万葉あ依をを合せて思ふよ。夫婦ハ殊小親睦
志む物あまバ。互ふぞ伊刀古と云む。まと從父母兄弟
ぬ。本を互ふ親睦みて云し。定ま依稱ふれま依あるは
し。師説よ。寢所屋之ありとあり。はと或人。寢
まど。床屋之寐とあぐ。ルにせ云す。床をさても有ぬべ
れ。非あり。ちよ夜能ハ。能夜を下上ふ寫誤ま依り。能
夜てふ例也。繼體天皇卷歌ふ。阿布美能夜。那那能。和久基
淡海之毛野。せほ依えを始よ。万葉十四よ。美奈刀能也。葦
若子あり。

は不泣者汝者雖言あす。○夜麻登能た山處之あるは。

まよ山本之よても有む。倭烟之と云よハ非じ其故を此處に留り給ふ人のうすを差て行あふとの倭此物よ

あつとへ云むこといかはと薄た。いぢこふめく多う

依物あるを出雲よして遠ま倭の字云むおとも由れく

まよ某野と。某山のやう云む似あはし加めあむ

逆く倭の薄や。殊ある名産あどれらバあそ有免さら

ではいので ○比登母登須く伎た。一本薄あす。今世よ此

一種あまど其よを非 和名抄よ。爾雅云草聚生曰薄新

あ一本抄く立るを云 撰万葉集云花薄波奈須く木。今按茅草盛也見唐韻

あす。神功皇后紀。仁德天皇紀あどふた。萩を須く伎と訓

す。夫木集薄の歌中よ。兼輔卿むらさたの一本はくき云

云。家集よむ二此句。高津宮段の大御歌よ。夜多能比登母

登須宜波拾遺集物名よ一本菊もあす。○宇那加夫斯ハ

項傾あす。和名抄よ。陸詞云項頸後也。和名宇奈之神代紀

ふ頗傾此云歌示志とあす。傾俗よ物の下とめ上の勝て此

は項を垂傾くるよて。泣さる戎云。はて上よ一本薄と置

く意よ連とめ天智紀ふ稻 ○那賀那加佐麻久ハ。汝之將

のことよ垂穎而熟とあり 泣あす。那加麻久や云べきなかく云む那久上め此も汝

は須世理毘賣を指す。麻久や年と云と同意ふて。麻志と

一辭ある戎。下ふ語多續むとて。麻久や活し云れす。可あ

下よあぐくとたむ辨久や云や同格あ ○阿佐阿米能ハ。

朝雨之れす。○佐疑理邇多々牟敘ハ。佐霧ふ將起ぞよて。

四言二句あは。

今云あは此二句よおきて論あり記傳ふ就て見べし。

はて右三句此

意を。汝が泣む其涙を。朝雨の如く。

まよ朝雨を。只霧を云む。為のみふてある

し。歎息ハ。狭霧ふ起む物ぞと云ふあは。

あはきハ。長息を約絶とる言よて

長くおく

息あは。息ハ霧よ立せ云は。万葉五ふ。

大野山紀利多知

和多流。和何那宜久於伎蘇乃可是爾。紀利多知和多流。十

五よも。君之由久海邊乃夜村爾奇利多。婆安我多知奈

氣久伊伎等之理麻勢とあは。

まよ同卷よ。秋佐良婆安比見牟毛能乎奈尔之可母奇

里尔多都倍久。奈氣伎之麻佐牟ともあり。源氏明石卷よ。歎きおくあうしの浦り朝霧の立やや人を思ひやる哉

まよ涙を雨よ云るハ。万葉三ふ吾泣涙有間山雲居輕引。

雨爾零寸ハあどあは。偕那迦士登波云くとあは。此まで此

意を括て云は。今吾離別て倭子往む。汝今あそむ心強く

泣じと云とも。必吾を戀憶びて。痛く泣お。歎か牟ぞと

云るあは。○和加久佐能ハ。若草之あは。あを妻と云む枕

言ぬゆ。冠辭考云。万葉九よ。

河内大橋よて。若草乃夫香有獨ゆ娘子を

良武十ふ。稚草乃妻手枕跡云く。仁賢天皇紀よ。弱草吾夫

何怜矣。

古者以弱草喻夫。婦故以弱草為夫。

とも見ゆ。あは春此若草ハ。愛し

く。美まほ。物あまむ。夫婦よ譬牙とあは。

草之益目類四寸

吾於富吉美可聞。これ右ふ云。如し。十一ふ。若草乃新

枕乎卷始而云く。若草ハ新しき草あまむ。女と新枕まく

よ云。うけお。若草十三よ。若草乃思。就西君自二云く。十四

ふ。於毛思路伎野乎婆奈夜吉曾。布流久左尔。仁比久佐麻

自利於非波於布流。○都麻能美許登ハ。妻之命ふて。是も

崎あど何也。式よ。因幡國八上郡よ。伊蘇乃佐只神社と云も見也。 淤知受ハ漏さば

刃也。祈年祭祝詞よ。嶋之八十嶋墜事無万葉一。寐夜不

落ま。川隈之八十阿不落四ふ。蓋世流衣之針目不落あ

ぞ。猶多加也。毎と云意あり。今ハ磯之崎とのみ云ふ故也。崎と云云。上ノ島崎ハ崎と云云。今ハ磯之崎とのみ云ふ故也。

崎く不落と云。前をも兼べしと云へり。○都麻母多勢良米

才妻將持有也。牟と云。遠きを米と云。牙依也。上此許曾

小應ふるあり。ちて母多須良米を云べして。母多勢良米と云る也。持せり持せるおど云下此理流

書を良言。於のひの格あり。故よ此時ハ良持。有と有字を添て

當れ也。まも母多須良米此と死也。多持。有と有字よ

はま。良才下よ。屬て良米を云。辞あり。此差ををく考ふ

し。○阿波母與阿波ハ吾者ふて。母與才助辭也。清寧天

皇紀大御歌よ。奴底喻羅俱慕與。まも於岐每慕與。置目人ノ名

己万葉一。小籠毛與あど何也。はと此字毛夜とも云り。万葉二よ。吾者毛也。を何る此

也同。○賣邇斯阿禮婆ハ女ふし。在者也。斯ハ助辭也。也

万葉三よ。手弱才女有者あども何也。今本の訓誤れり。 ○那遠伎

氏ハ契冲云。除汝而あ也。於伎也。有遠きを。於を畧けり。今

俗を哀久とかけむ。汝除てと。辭無ふ詔。予る。を思はる

まど然よ。非び置は於久の假字ありと云也。置の於を省く例也。日置

玉置あど。常多りの中よ。此を殊。神樂歌植春ふ。和禮乎支

天不多川万止留也。除我而取二妻也。あ也。 風俗歌よ。木見乎支天云

云。あど有も同格あ也。此風俗ある也。一本ふ也。 ○遠波那

多爾タニやハ俗言ふ布波理とも。布波布波フハフハを云詞ふて。此

は床トの周ナリに帷帳ヒあざれ襪ソク此。布波理と掛カにカする下よと

云ふれに。○牟斯夫須麻ムスフスマハ。烝被シヤクよて。暖ナカあカはカとシの稱ナあ

に。凡ツて牟須ムスと云言ハ物モノをアとクむルが本ホ義ギよて必カナし

被ヒの名ナを暖ナカあカはカこと烝シヤクが如ニくあカはカ故コよ云クと云フるト

似ニとスるトあカとカはカがラ言ハれ本ホ此コノ義ギをキハカはカして烝シヤク字ジあ

れハ別ワ名ナとモいヘまド然シよカはカらシ。○爾古夜賀ニコヤガ

斯多爾スダニハ柔ニヤ之下ノカふカにカ爾古夜ニコヤハカ爾古夜ニコヤ加カあカるカ字ジ加カ

省シヤクはカ煩マン曾ソウ多タ和ワ夜ヤ。○云フも細ホソ多タ和ワ夜ヤ加カれルを

云フこノせレれルふハ準スふハばシ。契冲セウチウ云フきキ万葉四マンヤクシよカ烝被シヤク奈胡ナカ

也ヤ我下丹ガゲタニ雖卧シレシモ。契冲セウチウ云フこの烝被シヤクを昔コノより阿都夫須アツフス万マン

木綿キワタと同物ドウモノあカにカ。今云イマ此布コノのことコトをカ既スよカ第ダイ

斯多爾スダニをカはカやカやカせカさカやカ久ク下ゲふカあカるカはカ。源氏物語ゲンジモノガト

の音ネあカひカそカとカはカ契冲セウチウ云フ清サヤ之下ノカふカにカ佐夜具サヤギを

とカれカぞカ有カよカ同ドウじジ。はカとカ契冲セウチウ云フ清サヤ之下ノカふカにカ今イマはカさカやカけカ

云フよカ二ニあカにカ騷サウぐカふカ通ツびカるカとカ。清潔セイセツとカ形カタめカ今イマはカさカやカけカ

方カタあカめカはカやカれカをカ清セイむカるカをカ日本紀ニッポンキよカ潔ケツ

字ジをカ書カてカ。佐夜米伎サヤメギとカ訓クニにカ云フにカ。師シ云フ佐夜具サヤギをカさカはカや

神武天皇カムヤマトの大御歌オホミウタよカ菅スガ疊タタミいカやカ敷シてカとカあるカ佐夜サヤも

清潔セイセツあカにカ。但タしカさカやカれカきカ意イあカらカむカ上ウヘの例レイよカ。佐波夜サハヤが下

勢セをカ思オモふカよカあカふカさカやカはカてカ此コノ次ツギにカ九ク句クはカ前マエ歌ウタふカ見ミ

えふ也。但し腕と胸を ○伊遠斯那世ハ。寐を宿と云

あやれぬ。斯ハ助辭。那世を前歌の那佐牟と同言れを。

此は寐よと云意ある故也。世とは云ふ也。埃囊抄人

を。下薦を。志おほむ云と云。るを誤れり。多。那須。那佐

はて阿夜加技能と云也。此までは。永く此因小留り給

ひふ。今也。吾を親まりふ。可美く寢給子と云ふ。其状を

演ふ依形也。○登與美伎也。豐御酒也。此を朝倉宮段。大

后御歌也。多加比加流。比能美古爾。登余美伎。多氏麻都良

勢。万葉六也。將還來日相飲酒曾。此豐御酒者。十九も。如

はと丈夫之禱。豐御酒爾。吾醉爾家里。吾字ハ甚 ちど何依

を思ふ也。豐御酒也。酒を祝て云。稱也。○多氏麻都良世

は。獻ま也。禮を延て良世と。ち多此也。御自大御酒坏を

指舉てと始ふ。あまバ。人よ仰せて。獻まと詔ふ。非交。

此獻ま也。飲賜へ也。云意ふて。男神御自給。免賜ふ御言

也。故契冲ぐ。聞食せと云也。注せる。とく叶へ也。右

引る朝倉宮。大后の御哥ハ比能美古 ちて飲賜子と云こ

を。奉まると云は。麻章禮也。云也同意也。麻章流也。他

此奉る。残也。自ら飲食賜ふをも。通いし。云は。奉るも其

如く。通はして。自ら飲食賜ふも。云免れ。續紀也。夜須美

斯留和己於保支美波。多比良氣久。那何久伊末之氏等與

美岐麻都流。お元正天皇の聖武天皇。此麻都流も獻る
 小て。飲多ふふと云意お巴。中昔の物語書おどよ衣服を
 依と云ひまよ著て坐候こと。ちて今かく御酒字勸免賜
 をも某を奉れ巴おぞ云り。ふは。今世俗ふいはゆ。中直めの盃此心ば子ふ似とり。
 ○夜知富許能と云と巴。下五句は。上三首此例よ據て。篤
 胤が私よ補へ依おめ。其は前段此二首は。と此前の御歌
 も共ふ。終の句を同じぬまむ。此御歌も。必ちう終と巴け
 むを。落せ依おを疑れし。然る在下よ。此謂神語とあるを。
 以て知られと。猶神語哥。四首を總結て。謂れる文お依を
 と云ふ。処よ注を見るべし。○宇伎由比。盃結よて。女神
 男神ふぐひふ。御盃をち交して。今と巴。長小心變らじ

を結固免賜ふ契を云れ巴。師を。宇伎由比。宇氣比。あり
 あり。ちて盃を宇伎と云。子る例を。朝倉宮。段三重。姝が歌。
 系。多麻宇伎と賦巴。王盃。猶其處ふ云ふ。今云ふ。雄畧
 し。結ハ。標結おど此結ふて。事を定免固むる意お巴。世俗
 あり。結納の由比。此意あり。或人もひい。まを。言入の誤
 あり。と云。中よ。ひぐこと。お巴。○和名抄。遊牝。豆流
 比。俗云。由比。とある。宇音。う。さら。げ。今世は。でも。万。此。事
 と。も。お。ち。此。の。由。比。此。意。よ。ち。非。交。今。世。は。で。も。万。此。事
 を契巴。固むる。依し。ふ。ハ。盃を差交。依お。む。ける。は。神代
 々め。此。風儀。お。巴。々。め。或人。今。世。の。盃。事。と。て。さ。し。交。依。を。
 巴。学。び。て。依。れ。り。と。甚。畧。式。あり。本。式。此。酒。宴。の。状。む。り。
 云。る。ち。中。く。お。非。お。巴。○。宇。那。賀。氣。理。氏。ハ。師。説。よ。互。ふ。項。
 小手を懸て。親く。竝居を云と。何巴。信ふ。然る。ば。し。但し。項
 よ。手。を。

掛居^{カケイ}を言の本此意ふて必しも然^シ。万葉十八^ノ。多豆佐波^{タマシハ}。爲^{タカ}後^ノとも親^ク。雙居^{フタイ}るを云るあ^ハ。利^リ宇^ウ奈^ナ我^ガ既^リ利^リ爲^テ氏^ノ。於^テ母^ノ保^ル之^ノ吉^ク。許^リ登^ル母^ノ加^フ多^ク良^ク比^トと^ス。上下^ノ此^ノ語^ヲよ^テ。其^ノ意^ヲ志^スられ^ト也[。]或人の此言を天翔せよふ意得とるを甚くひが。あ^ハ也[。]○イタテ至今^ノは[。]篤^ク胤^ノ云^フ。此^ヲ記^シ傳^フ。解^キを[。]缺^カき[。]多^クめ[。]故^ニ今^ノ此^ノを[。]解^キ辨^シ牙^ヲむ^トび[。]其^ノ志^ヲあ^ハれ^ト也[。]今^ノは[。]古^ノ事^ノ記^ヲ字^ヲ撰^テ。安^ク麻^ク呂^ノ主^ト此^ノ詞^ヲよ^テ。當^ノ世^ヲを[。]け[。]せ[。]依^テ今^ノ。古^ノ事^ノ記^ノ本^ヲ採^リ。依^テ古^ノ記^ヲ本^ヲと[。]有^シし[。]詞^ヲ。然^ルよ^テめ[。]其^ノ古^ノ記^ヲ字^ヲ記^シ傳^フ。あ^ハる[。]人^ノ此^ノ詞^ヲ。は[。]こ[。]此^ノ故^ノ事^ヲを[。]語^リ傳^フと[。]當^ノ昔^ノと[。]め[。]の[。]詞^ヲあ^ハる[。]を[。]記^シ。依^テの[。]詳^ヲあ^ハら[。]び[。]何^ノふ[。]ま[。]る[。]も[。]永^ク須^ク世^ノ理^ヲ毘^テ賣^テ命^ヲ此^ノ處^ニ。留^リ也[。]住^ル賜^フふ[。]こ[。]を[。]我^ノ云^フ也[。]○[。]鎮^座。鎮^座を[。]師^ト志^ス豆^ノ母^ノ理^ヲと[。]訓^レれ[。]た[。]ま[。]ど[。]も[。]然^ル。

訓^レべき[。]證^ヲ未^ダ見^ルぬ[。]也[。]舊^ノ訓^ヲ是^ヲ常^ニ某^ノ神^ノ某^ノ處^ニ鎮^座也[。]の[。]如^ク志^ス豆^ノ麻^ノ理^ヲと[。]訓^レべ^シ。云^フ。ま[。]て[。]只^シ其^ノ處^ニ坐^スま[。]や[。]此^ノみ[。]心^ヲ得^ルは[。]細^クし[。]か[。]ら[。]び[。]鎮^座と[。]は[。]他^ノ處^ニ遷^リ往^シ坐^スび[。]て[。]其^ノ處^ニ留^リ也[。]給^フ意^ヲ云^フ言^ハあ^ハる[。]也[。]志^ス豆^ノ麻^ノ理^ヲと[。]登^ル杼^ノ麻^ノ理^ヲと[。]通^ル牙^ヲめ[。]其^ノ例^ヲ也[。]神^ノ祇^ノ官^ニ坐^ス八^ノ神^ノ此^ノ中^ノの[。]王^ノ留^リ魂^ハ。王^ノ積^ル産^ル靈^也も[。]作^ル也[。]魂^ヲを[。]鎮^座む[。]る[。]意^ヲ此^ノ御^ノ名^ヲあ^ハれ[。]也[。]共^ニ多^ク麻^ノ都^ノ米^ノ年^ノ須^ク毘^テと[。]訓^レべ^シ也[。]留字積とも書るを以^テ。神^ノ留^リと[。]訓^レる[。]を[。]非^ニあ^ハる[。]也[。]と[。]を[。]知^ル。ま[。]祝^ス詞^ヲ高^ク天^ノ原^ニ。神^ノ留^リ坐^スと[。]あ^ハる[。]也[。]も[。]統^ル紀^ノの[。]詔^ヲよ[。]も[。]神^ノ積^ル坐^スと[。]あ^ハる[。]也[。]相^照して[。]此^ノ留^リも[。]積^ルめ[。]ち[。]て[。]都^ノ麻^ノ理^ハ留^リ住^ル意^ヲあ^ハる[。]故^ニ共^ニ都^ノ麻^ノ理^と訓^レべ^シ。積^ルを[。]知^ル。ま[。]借^ル字^ヲあ^ハる[。]積^ル字^ヲよ[。]訓^レべ^シ。此^ノを[。]美^ク留^リ字^ヲを[。]書^クる[。]也[。]積^ルを[。]知^ル。ま[。]留^リ字^ヲよ[。]義^ヲを[。]知^ルべ^シ。此^ノを[。]美^ク麻^ノ命^ヲ此^ノ因^ニ降^ルと[。]る[。]ふ[。]對^シへ[。]る[。]天^ノ神^ノの[。]降^ルら[。]び[。]して[。]天^ノ。

小留まト坐スをしれまば。鎮坐ト云セ通ヘ也。万葉五ノ海原ノ邊ハも奥ふも神豆麻利。うしはきいまは諸ノ大御神トち云く。此神豆麻利も鎮坐をいずめ。是ふて右レ此義字ちをるばし。然るをかの祝詞ある神留を師の集會の此神於ま也と相照して知べし。海の奥邊ニ神此集まり坐べき処はあらばこト海邊あるいハ奥ある島あども。鎮坐神とちを云ふ。ちまハ今此大神也。倭へ往坐むせしことある字也。オホホトシを思止して何處も往らざば。永く出雲國小留也住賜ふを云め。師説ふ倭國小鎮座あらば。出雲風土記也。所造天下大神大穴持命詔八雲立出雲國者。我靜坐國と也。今云ふ第百二十一段の本文ハ日代宮段小倭建命崩坐て伊採まく也。彼處をも見べし。日代宮段小倭建命崩坐て伊

勢ノ能煩野ヲ葬奉しを白身化て飛翔行て河内の志幾キも留賜ふ故也。其地小御陵を作て鎮坐し米也と有も。ト留奉し意也也。崇神を遷却ふ祝詞也。山川乃廣久清地爾遷出坐也。神奈我良鎮坐世止稱言竟奉と也。永く其處小留りて他子出還也賜ふ也也云意也也。出雲國造神持命乃申給久皇御孫命乃靜坐牟大倭國申天云く万葉二小高市皇子命を葬奉しことを朝毛吉木上宮乎常宮等定奉而神隨安定座奴崇神天皇紀也。矣。○神語歌本小以忌瓮鎮坐於和珥武鏝坂上ともあり。神語歌本小は神語と比み有を歌字也。篤胤が私小補予る也。そは記傳也。御紀小神の詔ふ御言を神語と云ふ也と數見也。大嘗祭式也。雜器者神語曰由加物まと神語所謂八開手

是也とのゆゑを引て。加牟許登と訓み。彼此一々解ま
 ぬまぜ。此を決して彼を別よて。此ある歌をも悉末を許
 登能加多理基登母。許遠婆と終とのゆ故よ。下よ出る夷振
 思因歌おど名け來し類よて。右の四首をむ。殊よ神語歌
 をいひ傳へて。所念れむゆゆ。其を雄畧天皇卷よ。三重
 姝歌。太后御歌。天皇大御歌ともよ。末字此と同く許登能
 加多理基登母。許遠婆と終免て。此三歌者天語歌也との
 ゆを思合まほし。此天語をも師を阿麻碁登と訓
 まねまよ。阿麻賀多理を訓べし。彼段此
 歌をもは姝が歌よ。天よ坐に神の天地を成坐る古事を
 裡よ含免て。語事もと歌へゆ故よ。天語歌といひ。此歌ぞ

もは男女神とち。互ふ語事もて歌給子る故よ。神語歌と
 云ぬるほし。あむ天語哥の下
 云ぬるほし。あむ天語哥の下

百

故此大因主神。娶胸形奥津宮

坐神。多紀理毘賣命而。令生給

出子。味鉏高日子根神。言主神。

次妹高比賣命。比賣命。亦名下照。亦名

謂大倉比賣命亦名謂阿陀加

夜努志多伎吉比賣命此神出

坐處於今云多伎也。

胸形奥津宮坐云。此御事ハ。既上見えと云。第三十

傳見る。はて大國主神の此神ハ娶賜へるあとを信びし

て。左右云枉るハ師言此如く後世の私事也。此神ハ

男大神の直此御子大國主神也四世孫ある故よ時代加

むまど無形神あど云後世の私言神名式ハ伯耆國會

見郡ハ大神山神社とある也。出雲風土記ハ火神岳と

依山の社也。此岳ハ謂也依伯耆大山也。此山の

第七十六段よ委く此社ハ竝て式よ胸形神社を擧ら

れと依字思ふ也。大神山也。大三輪山と訓て大國主神を

祭まる社也。依字也。然るを西行が撰集抄ハ伯耆國ハ大

はしまは利益の何らとある也。宋朝日此山端よ出る

俊方と云ハ依弓取野ハ出鹿を狩ル程ハ例とりも

鹿お布くと皆思ひ此外ハ射留ハ正扱此鹿どもを取

寸の尊像ハ矢を射立て鹿と見おる也。地藏ハぞおとし

奉りて泣お免きけまどもはらまひあしやがて手お

のら元どり切て。我家を堂よ作て。永く殺生を留免侍
正よきけり程よ。称徳天皇の御時社よい。奉れと云
託宣侍て。やがて堂を社よ為して。大智明神とぞ申侍る。
利益新おま。彼処の砂よも。夕ふをさう上りて。朝よ
下りて。万お正下向此相を示。彼岡の松。明神の御方
よ向ひて。皆あびき。帰依此姿を現ハし侍ると。や
心あき草木砂までも。帰依し奉る事。バ有。とくぞ侍
る。云くと云る。例の佛者此説おま。バ。慥ある證をハ為
のとし。然ま。此ハ神靈。或人聖。れど。此や。ご。あき。が
地藏よ。憑りて。験をあら。さ。て。大智明神を。斎。れ。と
依あり。此類いと多。り。神。ち。て。此。多紀理毘賣命。小御娶
社考よも。此説を引ま。と。正。ち。て。此。多紀理毘賣命。小御娶
てと有。は。や。の。て。須世理毘賣命。小御娶。へるを云。正。其由

次段小注を見。知。は。し。味。鉏。高。日子。根。神。味。ハ。阿。遲。鉏
は。志。貴。と。も。須。伎。と。も。訓。は。し。阿。遲。鉏。と。作。ま。ど。多。く。阿。遲
志。貴。を。書。き。書。紀。よ。味。耜。此。云。阿。遲。鉏。と。作。ま。ど。多。く。阿。遲
ま。と。出。雲。因。造。神。賀。詞。同。因。風。土。記。神。名。式。あ。と。ふ。こ。あ。須

伎と有て。志貴と。無。ま。ど。古。事。記。よ。志。貴。と。の。み。有。ま。バ
師。言。の。如。く。鉏。を。古。は。須。伎。と。も。志。伎。と。も。通。を。し。て。云。し
あ。る。べ。し。今。も。秋。田。人。あ。御。名。此。義。を。師。説。ふ。い。は。ど。思。得
ど。を。耜。を。し。キ。を。云。正。御。名。此。義。を。師。説。ふ。い。は。ど。思。得

後。ぞ。試。よ。云。は。阿。遲。ハ。可。美。と。同。意。ふ。て。稱。名。因。東。生。郡
阿。遲。速。雄。神。社。志。貴。を。磯。城。よ。て。石。し。る。築。と。る。城。の。固。き
と。云。も。あ。り。志。貴。を。磯。城。よ。て。石。し。る。築。と。る。城。の。固。き

戎。以。賀。と。る。名。よ。也。懿。徳。天。皇。の。御。名。大。倭。日。子。鉏。友。命。御
同。母。弟。よ。師。木。津。日。子。命。あ。り。鉏。友。命。御
鉏。師。木。津。日。子。の。師。木。と。一。あ。る。べ。し。ま。と。崇。神。天。皇。此。御
子。豊。城。入。日。子。命。豊。鉏。入。日。女。命。御。同。母。あ。り。此。も。豊。城。の
城。と。豊。鉏。の。鉏。と。同。意。を。聞。也。ま。ら。鉏。を。磯。城。と。は。る。高
扱。あ。り。師。木。を。書。紀。よ。磯。城。と。う。け。り。此。意。あ。り。高
日。子。根。を。天。津。日。子。根。あ。ど。同。稱。名。あ。正。出。雲。風。土。記。よ
ハ。多。く。根。字。を

省。記。て。一。言。主。神。こ。れ。御。名。の。義。を。雄。略。天。皇。卷。四。年。二
月。此。處。小。委。く。注。ふ。は。し。第。百。七。七。段。よ。且。ハ。云。べ。し。扱
お。を。味。鉏。高。日。子。根。神。の。亦。名。と

定、とること。土佐、因風土記。土佐、高賀茂、大神、為一言
主、余一説曰、大穴六道等、子、味鋸高彦根等、と有、よ據ま
法と徴よ云、るが如し。師、此説を非ありや云れ、れど
精、うらげ、此も雄略天皇、卷よ、委く注ふ、字見て知べし。

○高比賣命、名、義、師云、兄、神の高日子、小對、子、異、あ、依、事

也。陽成天皇、紀、元慶七年十二月、伯耆、因正六位上。○下

照比賣命、照を古事記よ、或、容貌、此美麗を云、る。今、一、の

り、そ、を、第、百、七、段、○大倉比賣命、あ、を、下、照、比、賣、命、の、亦、名、

と、定、と、依、由、を、舊、事、紀、よ、下、照、姫、命、坐、倭、因、葛、上、郡、雲、櫛、社、

を、あ、る、社、ハ、神、名、式、よ、葛、上、郡、大、倉、比、賣、神、社、一、名、雲、と、有、

ふ、て、論、あ、し。此、社、ハ、今、巨、勢、河、合、村、と、云、よ、在、て、宇、名、義、ハ、

い、ま、ど、思、ひ、得、え、○阿、陀、加、夜、努、志、多、伎、吉、比、賣、命、此、を、下

照、姫、命、の、亦、名、と、知、ま、る、由、を、ま、於、出、雲、風、土、記、よ、神、門、郡、

多、伎、郷、郡、家、南、西、廿、里、所、造、天、下、大、神、之、御、子、阿、陀、加、夜、努、

志、多、伎、吉、比、賣、命、坐、之、故、云、多、吉、神龜三年と、あ、り、眞、龍、解、

よ、此、を、決、定、て、高、比、賣、あ、り、阿、陀、加、夜、努、志、ハ、大、高、屋、主、あ、

り、阿、と、於、と、景、行、天、皇、紀、よ、日、向、高、屋、宮、と、云、も、あ、り、て、宮、

造、ハ、高、妃、を、宜、と、り、多、伎、吉、ハ、御、母、の、名、多、紀、理、を、同、じ、多

紀、都、多、伎、吉、と、あ、同、意、あ、り、也、云、る、實、然、る、説、あ、り、○多、伎、

郷、ハ、風、土、記、抄、よ、併、奥、田、儀、村、口、田、儀、村、多、伎、村、等、以、爲、一、

郷、也、云、く、多、伎、村、加、夜、堂、有、多、伎、吉、比、賣、神、社、と、見、也、風、土、

記、よ、並、在、神、祇、官、を、云、る、社、等、此、中、小、保、乃、加、社、の、次、小、多、

マシキコ、ニオホカミマラシキコノナクヨシラ
坐矣。於是大神告御子出哭由

テイメニネギセリソノヨイメニタマヒコノコトカヨハスト
而。夢願坐。則夜夢見御子辭通

キサメテトヒタマフトキニマラシキツトキイヅコラ
矣。寤而問出時。白御津矣。何處

シカイフトトヒタマヘバスナハチタチサリミオヤノミコトノ
然云問出則。即立去御祖命出

ミマヘライデマシテイタリトマリイシカハワタリサカノヘニ
御前出坐而。至雷石川度坂上

テココトマラシタマヒキソノトキクミイデソノ
而。此處也。白給矣。爾時。汲出其

ツノミヅヲテミミソノギマレキカレソコラ
津出水而。御身沐浴矣。故其處

イフミツトスナハチアリホクラカレクニノミヤツコマラシニカム
云三津。即有正倉。故因造。奏神

ヨゴトマテヅルミカドニトキニクミイデソノミヅヲテ
吉事。參向朝廷時。汲出其水而

モチフヨリテコレニイモハラメルヲミナハズクハカノムラ
用出。依此。今妊婦者。不倉彼村

ノイネヲモレクラヘバ。ウマールルコズモノイハ。
出稻若倉則所生出子不言也。

此段ハ。出雲風土記ある高岸郷。三津郷の故事を採合せ
て記せるやぞ。既ふ徴よ云ふが如し。○御鬚ハ握生云々
ハ。須佐之男大神の御事を。八拳須至于心前哭伊佐知志
矣と見え。第三十段ハ。垂仁天皇此御子。火牟智別王既及
三十而雖生垂八捩鬚尚常如兒泣而不問眞言とあるふ
相似とゆ事ハ。○高椅ハ。今俗よ階子と云物を通えと
也。垂仁天皇卷八十七年の。○養奉之ハ。比多斯麻都理伎
也訓ばし。王垣宮段よ日足奉とある。此字此意あり。委
七第

百六十三段
よ注せり。

○高岸ハ。風土記小神門郡高岸郷。郡家東北
二里とあり。和名抄よハ神門郡よ高岸郷あり。今本よ高
西天神村東北渡橋村中阿利原以。○御祖命ハ。御母多紀
為高岸郷今入塩谷村中と云へり。○御祖命ハ。御母多紀
理毘賣命を申は。御母を御祖を申は由也。○八十嶋とは。

上ふ嶋之八十嶋とも有る如く。多かる嶋を云。率巡る
せは。垂仁天皇卷よ。本年智和氣御子此事哉。率遊其御子
之狀者。在於尾張之相津。二俣相作。二俣小舟而云々。とあり

ゆよ同じ。○宇良加志ハ。明宮段よ。天皇宇羅宜是所獻之
大御酒而御歌曰云々。若櫻宮段よ。於大御酒宇良宜而大
御寢坐也。とある宇良宜と同言よ。師説の如く。びぐる

御寢坐也。とある宇良宜と同言よ。師説の如く。びぐる

御寢坐也。とある宇良宜と同言よ。師説の如く。びぐる

ふ心たもあろく。浮立を云と聞ゆる。宇良ハ心宜を活
解あるばし。眞竜解よ此の宇良加志を舟よちて宇良宜
てあらぐけ意ふ解るを非ありは。おのちのら然るを云ひ。宇良加志ハ。令宇良宜を云て。
此を哭を止て。宇羅宜給ふばく。云はあ。契沖ガ雜記
をてうらかひと云も。此宇良加志よ。手を加へて云よ。や
日本紀よ。推字をウラカスと訓。テウラカスと云も。此
ふ同じき。○大神と云。大因主神を申せ。○告御子之
やと云。○大神と云。大因主神を申せ。○告御子之
哭由而。天神とちよ。告賜ふれ。○夢願坐と云。御子之
哭由を御夢よ。誨賜牙也。願坐る。○夢願坐と云。御子之
物。の一種も。登さ。て。あ。る。百。物。知。人。と。ち。よ。何。あ。は。神。の
御心といふ事を。御隠。正。坐。て。御夢の。告。を。請。給。へ。る。あ。ど。即。
あ。る。ぞ。忌。殿。よ。御隠。正。坐。て。御夢の。告。を。請。給。へ。る。あ。ど。即。
神代。お。早。く。大。因。主。神。此。始。米。置。と。る。牙。は。神。事。れ。り。な。り。
崇神天皇の御代よ。天下此作りと作る。

神武天皇倭よ。征入給ふ時よ。賊軍強かりし。○則夜也。
ぞ。御寝まして。天神。御夢の。誨。を。請。給。ひ。た。○則夜也。
曾能余と訓。○夢見御子辭通矣。は。や。の。て。天神とち
此御靈威よ。依て。れ。り。○寤而問之ハ。御子よ。大因主神の
問給ふ。あ。り。○白御津矣ハ。大因主神。御子。此。答。給。ふ。御
言。あ。り。但。し。か。く。白。給。ふ。時。也。い。は。ど。御津。て。ふ。地。名。あ。き
時。れ。ま。ど。も。津。を。稱。す。て。御津。と。詔。へ。る。れ。り。○何處然
云と問給へるも。大因主神。あ。り。○御祖命の御前を立去
出。坐。て。や。は。其。御。膝。の。邊。よ。馴。遊。び。居。給。ひ。ら。む。が。御。父。神
此。志。の。問。給。ふ。故。ふ。其。津。を。指。を。し。牙。白。さ。む。と。て。立。去。出
坐。る。れ。り。○至留石川度坂上而云。石川度。や。え。石。川。を

向^{サキ}牙^カ度^タ依^ヨ由^ヨよ^レ非^ヒ交^マ石^{イシ}川^{カハ}邊^ノ此^{コノ}義^ギふ^テ其^{コノ}川^ノの^ノ邊^ノ亦^モ依^ヨ坂^カ
上^ノよ^レ至^リ留^ルり^テ坐^スて^シ其^ノ石^ノ川^ヲを^シ指^シて^シ御^ノ津^ノと^シ此^ノ所^ヲと^シ詔^ル牙^ヲ
由^ル亦^レ也^{ナリ}。前^ノ小^ノを^シ石^ノ川^ノ度^ヲ至^リ留^ル坂^ノ上^ニ而^シと^シ文^ヲを^シ成^スと^リし^テ誤^ル亦^レ也^{ナリ}。
巴^ノけ^テ其^ノ川^ヲを^シ眞^ノ龍^ノ解^ルよ^レ仁^ノ多^ノ郡^ノ戀^ノ山^ノ郡^ノ家^ノ正^ノ南^ノ北^ノ三^ノ里^ノ。
古^ノ老^ノ傳^ニ云^フ和^ノ邇^ノ戀^ノ阿^ノ伊^ノ村^ニ坐^ス神^ノ玉^ノ日^ノ女^ノ命^ヲ而^シ上^リ到^ル爾^ノ時^ニ玉^ノ日^ノ
女^ノ命^ヲ以^テ石^ノ塞^テ川^ヲ不^レ得^ル會^フ所^ニ戀^ル故^ニ云^フ戀^ノ山^トと^シ有^ル。今^ノ云^フ此^ノ山^ヲを
抄^ス俗^ノ呼^フ云^フ
古^ノ振^ノ山^トと^シ有^ル阿^ノ伊^ノ村^ニ也^{ナリ}三^ノ津^ノ郷^ノ中^ニ亦^モ也^{ナリ}戀^ノ山^トと^シり^テ落^ル依^ノ水^ヲを^シ阿^ノ伊^ノ
川^ニ也^{ナリ}い^ふ此^ノ川^ノあ^るば^らし^と云^フ。あ^レを^シ猶^トと^シく
考^フふ^べし。○其^ノ津^ト也^{ナリ}。
上^ノよ^レ謂^フ也^{ナリ}依^ノ石^ノ川^ノ也^{ナリ}也^{ナリ}。儲^ル其^ノ水^ヲを^シ汲^リ出^スて^シ御^ノ身^ヲを^シ沐^ス浴^ス給^フ牙^ヲ
依^レ也^{ナリ}即^チ禊^ス亦^レ也^{ナリ}。○三^ノ津^ト也^{ナリ}。風^ノ土^ノ記^ニも^モ仁^ノ多^ノ郡^ノ三^ノ津^ノ郷^ノ郡^ノ家^ノ西

南^ノ北^ノ五^ノ里^ノ大^ノ神^ノ大^ノ穴^ノ持^ル命^ヲ御^ノ子^ノ阿^ノ遲^ノ須^ノ積^ノ高^ノ日^ノ子^ノ命^ヲ云^フ故^ニ。
云^フ三^ノ津^ト。神^ノ龜^ノ三^ノ年^ノと^シ有^ル也^{ナリ}。
改^メ字^ヲ三^ノ澤^トと^シ有^ル也^{ナリ}。
即^チ此^ノ云^フと^シ切^ルと^シる^ハ和^ノ名^ノ抄^ス也^{ナリ}。
三^ノ澤^ノ郷^トと^シ見^ル也^{ナリ}。風^ノ土^ノ記^ニ抄^ス併^シ湯^ノ村^ノ槻^ノ屋^ノ北^ノ原^ノ尾^ノ原^ノ石^ノ村^ノ比^比
羅^ノ田^ノ鴨^ノ倉^ノ上^ノ鴨^ノ倉^ノ四^ノ日^ノ市^ノ原^ノ田^ノ鞍^ノ挂^ノ乙^ノ社^ノ大^ノ
吉^ノ川^ノ内^ニ三^ノ成^ノ堅^ノ田^ノ大^ノ谷^ノ高^ノ尾^ノ大^ノ馬^ノ來^ノ小^ノ馬^ノ來^ノ○即^チ有^ル正^ノ倉^ト
下^ノ河^ノ井^ノ上^ノ河^ノ井^ノ等^ノ北^ノ三^ノ所^ノ為^ス三^ノ沢^トと^シ有^ル也^{ナリ}。
は^ノ風^ノ土^ノ記^ニも^モ同^ノ郡^ノの^ノ在^ル神^ノ祇^ノ官^ノ也^{ナリ}と^シ有^ル社^ノも^モ或^チ澤^ノ社^ト也^{ナリ}と^シ有^ル也^{ナリ}。
是^レ亦^レ也^{ナリ}。風^ノ土^ノ記^ニ抄^ス阿^ノ遲^ノ須^ノ伎^ノ高^ノ日^ノ子^ノ命^ヲ曰^ク大^ノ森^ノ大^ノ明^ノ神^ト
在^ル三^ノ沢^ノ郷^ノ原^ノ田^ノ村^トい^へり^{本^ノを^シ三^ノ津^ノ社^トと^シ稱^ス也^{ナリ}。}
を^シ此^ノも^モ神^ノ龜^ノ三^ノ年^ノも^モ三^ノ澤^ノ神^ノ社^ト也^{ナリ}也^{ナリ}。清^ノ和^ノ
天^ノ皇^ノ
紀^ノも^モ貞^ノ觀^ノ十^ノ三^ノ年^ノ十^ノ一^ノ月^ノ十^ノ日^ノ出^ス雲^ノ因^ニ從^ス五^ノ位^ノ上^ノ御^ノ沢^ノ神^ノ正^ノ
五^ノ位^ノ下^ノと^シ有^ルり<sup>小^ノ朝^ノ熊^ノ神^ノ鏡^ノ沙^ノ汰^ノ文^ノも^モ永^ノ保^ノ三^ノ年^ノ閏^ノ六^ノ月^ノ十^ノ
五^ノ日^ノ出^ス雲^ノ因^ニ司^ノ言^ノ上^ノ云^フ鎮^ノ守^ノ水^ノ沢^ノ明^ノ神^ノ御^ノ正^ノ躰^ノ失^ル坐^ス者^ト同^ノ月^ノ
九^ノ日^ノ宣^ス旨^{云^フ宜^ク仰^テ因^ニ司^ノ祈^ノ請^ノ重^ク經^テ言^フ上^ノとい^ふ事^トも^モ見^ル也^{ナリ}。}</sup>
け^テ此^ノ神^ノ也^{ナリ}か^ク哭^キ坐^スる^も亦^レ也^{ナリ}本^ノ牟^ノ智^ノ和^ノ氣^ノ御^ノ子^ノの^ノ出^ス雲^ト

大神の御崇ふて。哭坐ナキマ依ヨ準ホト子コて思オモ子コ也。他神タカミヤ此コノ崇ホトよや有アルらむ。眞竜マコノリ説トクよ。強言ツヨクおがら三津ミツ也。斐伊ヒイ川カハ上ノりて。手名後テナノチも廢ユヅルまよ依ヨを崇ホトりて。此コノ御ミコ子コ事コト起トキしとるトり云イハす。○圀造ウツクサとは。出雲イセ圀ウツクれあす。委オモく也。第三十八段ミヤコ此コノ傳ツタよ注ツケせざるを見ミべし。○神吉事カミヨシハ。加牟余カムコ基登キトと訓ツケべし。延喜式エンキシキ八卷ヤツの末ノも載ノられとる。出雲イセ圀ウツク造ツク神賀カミ詞ノを云イハふ。此詞コノを奏ソウしふ。朝廷テウテイ小參コサン向ムカ依ヨあせ。元正ゲンテイ天皇テンノウ紀キよ。靈龜レイキ二年ニニ二月ニ丁テイ己キ。出雲イセ圀ウツク造ツク外正ソトテイ七位シチイ上ノ出雲イセ臣ウツクノミ果安齋ハカヤス竟ノ奏ソウ神賀カミ事コト云イハくと有アルを始ハジめて。次ツギく小見コミえあす。但し圀史ウツクシよ見ミとる処トコロ也。かく後ノチあまぜ。奏ソウし來キまるルハ是コトをり遙トホよ上ノ代ノありらむ事コト也。云イハも更マシれルを常トコの定サれル事コトありし故ユヅリふ。記キし洩ユヅさき圀史ウツクシよ記キされと依ヨ時トキ也。却サカりて時トキく。其事コトの無ナすルとモ有アルら依ヨ世ヨぞ有アルらむ。此コノ詞ノを奏ソウす儀ノ式シキあど。凡ソトて

此コノ賀詞カノノミのこと也。師ウチ此コノ神壽カミノイダシ後ノチ釈ツケといふ書ツキよ説トク尽ツクさまとり。けりて此コノ詞ノを奏ソウしふ。參向サンキョウする時トキふ。其コノ水ミヅを用ヨウふヤは。禊祓スエハヒよ用ヨウふる由ユあ依ヨぶル。其コノを畏オソれ天皇テンノウ命ノミ此コノ大御前オホミマヘふ志シて。古事フルコト此コノ大長オホナガ妃ハハ文フミれまバ。奏ソウし誤アヤマらじとの事コトあ依ヨべし。○妊婦者ニヤメノコ不食クハナク彼カノ村ムラ之ノ稻イネ也。生子ウマヒ此コノ年トシ長ナガクるまで。哭ナキて辭コト通トウぬルよ。あえあむコを忌イハてあり。○若食ニヤク則スレバ云イハく。果ツマしる高日子根タカヒコネ命ノミの御事ミコトふ。あえ多オホク言コト語ゴざる由ユあす。是コトよ依ヨれる多紀理毘賣タキヒメ命ノミ也。高日子根タカヒコネ命ノミを妊ニヤ賜タマへ依ヨ間マふ。此コノ村ムラの稻イネ字シ食シ賜タマへる故ユヅリ也。生坐ナマカる御子ミコ也。言コト通トウはらすル如スく思オモえ依ヨまさぜ然シカらば。彼カノ御子ミコの哭坐ナキマて言コト語ゴ給ツケざり志シは。他神タカミヤ此コノ崇ホトあるが。そま三津ミツ郷サトふて也。

事亦正し故ふ。妊婦此村此稻を食へば。彼よ似せて。然る事此有よ肌も有なる。

三百

故是味鉏高日子根命出后。天

御梶日女命。産給多伎都比古

命出時。來坐多吉村而。教曰。汝

命御祖出向位也。欲生此處宜

也。詔矣。神名槌山出西。有高

一丈周一丈許出石神。亦側有百

餘許出小石神。其所謂石神者。

即多伎都比古命出御魂也。早

乞雨時。必令零也。亦子鹽治毘

古命出坐處云止屋。此神生子。

謂燒太刀火守大穗日子命。

天御梶日女命。おむ誰神の御女と云おむも。御名義も未考得也。若くハ天石門別神此御女天津羽く神と同神。よ注を見べし。眞竜の解よ。赤衾伊努大住日子佐別命と。高日子根命とを同神とし。日子佐別命の后天甕津日女命と。此の御梶日女命を同神せ為さるむ。いとく非こむ。○多伎都比古命。名義下ふ云。○多吉村ハ一本よ多久村とあり。楯縫郡楯縫郷よ在。今は多久村と云ぞ。○教曰ハ。多伎都比古命。

いほご生坐さび。御腹内よ坐はふ詔ふれり。神功皇后のとき其御腹ある御子の生坐むとせし。石字御裳此腰よ挿みて。事竟て遷らむ日よ生坐せと詔へるよ。同じ意む。○汝命ハ。那賀美許登と訓。賀之の意あり。段の傳ふ。○汝命御祖む。此ハ御祖父母大國主神多紀注せり。○向位ハ詳あらねど。多久村ハ邊ふ當昔御祖二柱の御屋ハ有らむ。今御子産むと爲給ふ處。其御屋よ直ふ向へ位おれ。ば。此處よて産むを欲ふ。と詔へ依趣ふ通。ま。牟加比久良と訓。考の如く。御祖神とちの御子多くて。似給む。御意よや有らむ。ちて多伎都比古と申は御祖母。

此御名を取給する所は。多伎てふ地名に依るるに
依れるるよて。○カミナヒヤ神名槌山也。本書に。楯縫郡神名槌山郡家
末おほべし。○カミナヒヤ神名槌山也。本書に。楯縫郡神名槌山郡家
東北六里一百六十歩。高一百九丈五尺。周九一里一百八
十歩とあり。凡て出雲風土記に。神名備山と云山三所
あり。出雲郡と此也。けりて神奈備と云。岡部翁説に。神比毛
理あり。毛理の約美よる。神奈美あるを。通はして。備と云
る所あり。委くは。第百二十段の。然れど此山也。多伎
都比古命此坐社ある故。かく名とあり。出雲郡ある
美高日子命社あり。秋鹿郡あるを。佐
太大神社の在るも。思ひ合はべし。○一丈は。比登都惠
と訓はし。丈と云は。もと杖を以て。物の長さを度すこと

に。出と依名あり。委くは。景行天皇卷の始に注ふを見と。○石神ハ。伊波賀微
を訓べし。文徳天皇紀齊衡三年十二月此處に。常陸國鹿
嶋に磯小依來坐る。大奈母知。少比古奈命の御魂此石神
まに能登國羽咋郡に坐る。大穴持神像石神社宿那彦神
像石神社おど有ハ。神像あせる石にて。神比御魂の化れ
依と聞ゆ依を此あるを。高と云ひ。周と云るを思ふ。神
像あせるとは聞え。本と云由有ハ。石小。御魂字留給
する物を通えと云。風土記抄に。神名槌山。楯縫郷多久村
と云。高一丈。周一丈とある石神也。多伎都比古命の御魂
を留給へ依あるべく。百餘許の小石神也。從奉る神等此
御魂を留る。けりて風土記に。在神祇官とあり。社比中ふ
よぞ有べき。

多久社を云ふ也。

抄よ楯縫郷多久村大市社大神也とあり。

神名式よ。多久神

社との依は是あり。多伎都比古命此御社あるを云も更

あす。抄よ今を大市社大神と申はと云依よ付て真竜

大津日女命とも云。○鹽冶毘古命。鹽冶ハ地名の止屋

小依て。夜牟夜を訓ばし。字音を用とるあり。御母ハ知

からび。名義もいまだ思得。地名を神名よとりて負と

古命の亦名々と。○止屋を本書ふ。神門郡鹽冶郷郡家東

北六里阿遲須積高日子命御子。鹽冶毘古命坐之。故云止

屋。神龜三年改字。塩冶とあり。和名抄よも鹽冶と見也。風土記抄よ

谷今市大津北者武志大塚渡橋等以為。○燒太刀火守大

穗日子命。燒太刀は太刀よ刃を云ぐ。あまむ。火小係とる

發語あり。万葉四ふ絶と云は。和備をみせむと燒太刀

乃。隔付ふ事は幸くや吾君。岡部翁云。あま太刀ハ鞘を隔

ふ人の住里の近らま。十四ふ。夜岐多知乎。刀奈美能勢伎

爾云。岡部翁云。こむ多知乎と。二十ふ。安佐欲比爾。禰能

未之奈氣婆。夜伎多知能。刀其己呂毛安禮波。於母比加禰

都毛。岡部翁云。こむ刃の利を人此心此敏ふ云うける。物

思ふふ敏心もうせてあおきも知交して此み在と

あり。あまむ連と。燒太刀としめ云は。太刀は。燒刃して作

まむあり。大祓詞よ。燒鎌乃。火守む。此神火を守。賜ふ由

有めて負坐らむ。大穗とは。火の穗よ依まざる稱。あふ第

五段出雲、因阿菩大神のさて神名式ふ。神門郡よ。鹽冶日子、命、御子。燒太刀火守大穗日子、命、神社とあり。常の印本を脱し。大を天よ誤まり。此社を。今も火守神社を云とぞ。今を古本よ依て補へ。上田百樹云。今も出雲、因造ハ別火ある。其火を天の火よ。今め傳子とりと云へ。バ火守神ハ其火より由ある神あり。ぬち式よ。同郡よ。鹽冶神社。鹽冶比古神社。鹽冶比古麻由彌能神社。あど三社あり。風土記同郡よ。竝在神祇官と云ふ社の中よ。夜牟夜社と云グ三社あり。是あり。はべし。然はよ。燒太刀火守大穗日子、命、社と云は見え。不在神祇官とあり。は社等此中よ。塩夜社。火守社。同鹽夜社を竝に載と。然まバ式あり。燒太刀火守大穗日子、命、神

三百

社ハ。あの火守社を。風土記を進れる天平五年と。ハ後。官帳より列られし。ハ。風土記抄よ。右六社。何まも塩谷。王朝倉大明神。石塚大明神。天津竜王。同所。辨戈。天あど申候と云へ。ハ。

大因主神。亦娶邊津宮坐神。高

津比賣命。亦名神屋。而令生給

出子。積羽八重言代主神。次妹

タカテルヒメノミコトマタムトシ
高照比賣命。亦將御合須佐出

ヲノミコトノミムスメヤ
男命出御女。八野若比賣命而。

シメタヒツクラヤラシトコロアイフヤ
令造屋出地云八野。亦娶高志

ノヌナガハロメノミコトニテシメウマタマヘルミコラ
出沼河比賣命而。令生給出子。

マラスミホススミノミコトト
謂御穗須須美命。亦名健御此

カミノマシマセルトコロアイフミ
神出所坐出地云美保。亦子山

シロヒコノミコトノマシシトコロアイフヤマシロトス大チアリ
代日子命出坐處云山代。即有

ホクラマタノミコワカフツヌシノミコトノミカリ
正倉。亦子若布都主命出。御狩

シマシシトキニニオホヌノサトノニシヤマセタヒタ
爲坐出時於大野鄉西山。令立

カリビトラテオハセル平イタリキタヤマノカフチ
狩人而追出猪。至北山出河内

谷而。其猪出跡失焉。爾時自然

哉。猪出跡失焉。詔出。故其處云

内野矣。今云大野者訛也。亦此

神。天御領田出長供奉而坐出

鄉云美談。即有正倉。此大國主

神出御子。凡有百八十一神矣。

以十五柱為珍子。而天下四方

國人等。令咸蒙恩賴矣。

邊津宮ハ胸形の邊津宮也。高津比賣命ハ即多岐都比賣命也。此御事も既よ上ふ見えと也。第三十六段の

神屋楯比賣命名義ハ師云屋楯ハ彌高照の省也と依ふ也。言代主神の妹よ高照比賣命あり御母まとは楯ハ明

宮段大御歌ふ娘子を美て宇斯呂傳波袁陀氏呂迦毛と

とほせ給へる如く姿美稱とる名小もや阿波國勝浦郡事代主

神社ま建島女祖命神社あり積羽八重言代主神積羽

由ありげよ聞ゆ故よ奉於積羽八重言代主神積羽

を舊事紀ふ都味齒と御名此意を末よ注べし第百十七段此神の

隠坐坐処の○高照比賣命此御名を本書舊事紀ふ高照

傳見るべし光姫大神命とある照光ハ上

あ依下照比賣をも古事記よ下光比賣をも作て二字と

もよ一字放ちて成流ふ借とる字ある故よ高照姫をも

高光姫とも有むを傍よ按し置と依を誤りて二字共

ふ書とるあり某姫大神命と云こと例ありまむ大神二

字を決免て行りて入御名此義下照比賣と申は御名を

とるあり故今刪去於地神本紀よ此神を坐依

同く容貌の美麗を云あるはし國葛上郡御歳神社と云

るを心得え若くを由ゆてちて三女神とて多紀理毘

相殿おどよ坐はとしよや多紀理毘

賣命狹依毘賣命亦名市杵島比賣命多岐都比賣命亦名高津比賣命と御

名を三よ變カ二柱ふ御身を分ワカ坐おとも有まぞウヤト案を

上ふ云ふ如く須世理毘賣命一柱ふ坐ませむウヤト娶多紀理

毘賣命而云く娶高津比賣命而云くと御名は替カとまど

案は須世理毘賣命ふ御合て生坐るツラク也ツラク是ふ就て熟く

思子バ味鋸高日子根神と言代主神と同神下照比賣と

高照比賣とも同神よて共ふ須世理毘賣命の生坐るツラク也

也ツラクけゆツラクそを此比賣神ハ須佐之男大神此御言よツラク嫡后と

るおとあるを御子生給を有べきツラク也大神主神ハ御長子と通也

子は百八十一神とある中お言代主神ハ御長子と通也ツラク

姑を然れども此を人の甚く驚くことある故よツラクは図

さて、今此の傳ふ辨ふるありき。其は未だ言代主神を御父大神の御言ふも、八重事代主神爲神之御尾前而仕奉則不有違神と詔するばり也。御稜威ある神あはれ。出雲風土記に餘御子神とちの事は多く見えとる。言代主神の事をては一事ふれく。御名もかたて見え。まゝ高日子根神此事を。出雲風土記に多く傳は也。記紀とも。天稚日子段を見まば。高日子根神を御稜威いみじ神ある。皇美麻命の天降坐むと云る時。經津主神。武甕槌神降賜ひて。大國主神よ問給ふ。言代主神よ問て。報命さむと。白賜ひ。言代主神避奉り給へは後。亦有可白子乎と問

せは。健御名方神あ也。此を除て無し。と詔へるを思ふべし。高日子根神。言代主神と別神ふ坐まはれ。高日子根神ありと詔はて有べき。是を以て同神あは事哉思ひ定む。是よ依て考ふる。阿遲須枳高日子命と申記。此名をもて故事どもを語。言代主神と申。御名を皇美麻命。御國を避奉賜ふ事よ。於て負坐。御名ある故。風土記に天稚日子段。高日子根神と申。ぞ有は。記紀とも。天稚日子段。高日子根神と申。御名をもて傳は。國避段。共言代主神を申。御名あるを。思ひて。古傳の正きことをも辨ふべし。例を云は。天兒屋命。天思兼神。同神ある。常は。兒屋命と申。御名をめて傳へ。思慮此事よ用あは。処のみ。思兼神を申。御名もて。は。是と也。及て考ふ。下。照比賣。高照比賣同神あは。と。此まゝ論ひ。其を此

と云 式よ同郡ふ。八野神社とある是れ也。今屋野村と云
行り。式よ同郡ふ。八野神社とある是れ也。今屋野村と云
ふい。○御穂須く美命。健御名方神。お此二名、義下小注ふ
はし。第百十八段の傳見べし。○美保ハ。風土記よ。嶋根郡美保郷。郡家
正東廿七里一百六十四步。所造天下大神命。娶高志。因坐
神。意支都久辰爲命子。俾都久辰爲命子。奴奈宜波比賣命
而。今産神。御穂須く美命。是神坐矣。故云美保とあり。抄よ。関村。
福浦西者森山東者雲津諸食等。爲三保郷。森山。舊曰横田。則在横田社。又三保灘。積十八町。東俗有言。島之神。處乃事
代主神在于此島。坎といへ。はと同郡ふ。在神祇官とある
社の中ふ。美保社とあるは。神名式よ。美保神社をあるは是
あり。風土記抄よ。斎三保郷。御穂須く美命。大
まと不在神
穴持命。奴奈宜波比賣命。三坐とあり。

祇官と云社の中ふも。三保社あり。抄よ。並記。事代主神。同
誤あり。○山代日子命。御名の義代ハ。知れ意あり。山を知給
牙。由ありと有して。負坐るふ也。因名の山代を負給へる
よ。本書小。意宇郡山代郷。郡家西北三里一百廿步。所造
天下大神大穴持命。御子。山代日子命坐。故云山代也。即有
正倉とあり。抄よ。山代郷。竹屋八幡間。湯矢田津田。乃木阿
抄よも。意宇郡。○即有正倉と云。祠を同郡よ。在神祇官
をある社の中ふ。山代社をあり。抄よ。山代郷。津田村。中御
神名式よ。山代神社とあるは是れ也。○若布都主命。此を
經津主神也。天より降して。因巡給へは時ふ。從給へる謂

おど有しふや。布都の義末ふ云はし。

神の百十三段経津主、神の下に傳見べし。

○大野郷を秋鹿郡おど。下よ見也。○追之猪。

諸本よ猪、犀とある犀を

行あり。そのみ有をや。和名抄り。猪一名氣。和名井とあり。

猪字を西土よて。夫多てふ物よ用ふ字よて。皇國よ謂也。

字よ此み用。ひ來まて。○北山之河内谷とを同郡よ。大野川源出郡。

家正西一十三里磐門山。

風土記抄よ磐門山。大野、南流入郷本谷村、山名也とあり。

于海と云川の河内あるはし。○其猪之跡失焉云く。獸ハ。

足跡を尋て追取る物れるよ。此處よ至て其跡見え成。

怒るは。自然哉云く。此御言を思ふふも尋常此猪とを聞。

えはと。其由いはと考得也。神武天皇の熊野お入坐る時、大熊出て忽よ失せ倭建命

足柄山よ到坐る時よ。白鹿の出來れる。香坂王、忍熊王の
宇氣比、搦し給する時よ。大猪出て香坂王を咋とるおど
を善うらぬ例あれど。此。○内野ハ。本書風土記よ。秋鹿郡
はさる事とを聞えは。○内野ハ。本書風土記よ。秋鹿郡

大野郷。郡家正西一十里并歩云く。此約とる文を。即本
文よ採まる傳あり。故

云内野。失ぬを内野と云るは。廿然今人猶誤大野號耳と
とちを通へは例あり。

和名抄よ。大野と内野。風土記抄よ。合於大野村及
魚瀬浦、大垣村、中、高宮、明神座、山、為一郷といへり。

はて在神祇官とあは社の中よ。宇知社あり。抄よ。大野郷
河内谷大神

和加布都怒志乃。神名式よ。内神社とあは是れ也。○天御
命也といふり。

領田之長ハ。阿米能美志呂陀乃加微を訓はし。前よ。天
をア一を

訓し。後よ。おたア。此を外よ所見ありまど。試ふ云
と訓べく考定免於。

は。大國主神。此御國よ御田を作て弘免給するよ。其

名比見と依え。御井神。まゝ木俣神とも申は。御母味鉏高

日子根神。亦名ハ言代主神。まゝ高照比賣命。まゝ下照比

柱の御母ハ須世御穗須く美命。まゝ建御名方神とも申

理比賣命よ坐は山代比古命。若布都主命。この二柱は御母此六柱と

也。餘小御名も傳ら交。但し神名式よ并築大社の次よ同

御子玉江神社と云見え意宇郡小大穴持御子神社同社大穴持

ありまゝと出雲郡よ大穴持海代日古神社大穴持海代日

女神社と云もあ也百八十一神比中よ十五柱を珍子と爲給へ也。

也有まむ。其十五柱也。皆卓越とる功德の神等小坐ませ

依あと言も更あ也。珍子とは。伊邪那岐大神比生給りる

神の中よ。大御神と須佐之男神とを。殊よ珍子と爲給り

依が如し。○天下四方固とを。天下よ有也依。万此外固と

を云。○今咸蒙恩頼矣。をは。十五柱珍子神とちを。御固の

四方ある方固く。小班遣して。其固くを經營固也。種く此

事字も始し交也。其固人等よ。恩頼字蒙らし。米給へるを

云。然まむ大固主大神比。數の比賣神を呼ひ給り依事也。

御子多く生坐して。中よ卓越と依字擇びて。此事小使ひ

給をむと比御態あ也けり。例を云は。景行天皇大八島

の御心ありて。御子八十柱生し。賜ひ。中よ三王を太子

よ定賜ひ。其餘比七十七柱の御子等を悉り。固くの固造

和氣稻置縣主あどよ別依し。賜へるが如し。まゝと甚く後

此事あがら。保元物語よ源為義朝臣思ふ旨ありて。男子

を六十六人儲々て。六十六个固よ一人お。置むと思ひ

在、せむと為さるも、意は予似たり。思ひ合ふは、はと此に依て思ふ。漢籍佛書を始、外圍の籍等。世に初、某氏某天おと云神の出て、其圍に功徳成せ、趣の古傳も數見ゆ。前も云る如く、大名持少毘古那神、及此ある十五柱神とち、此御態字、訛に傳、と依よそ有るは、第九十四段の傳、抑、諸、外圍の開闢れる事、趣字、あ、よ取、總て云は、ま、初ハ、天津神とち、此産靈ふ因て、湊沫の大、くも小、くも疑成まるを、此事、第九段、見えたり。少毘古那神、天降りて造、固坐し。此、神やぐて、宇麻志葦牙比古遲神、よていと早く、外圍は放、降に給ひ、むこと、第九十三段、九十四段、おどの傳を見て、知、然る間、須佐之男、大神、五十猛神、見廻に給ひ、辨ふべし。

此神とちの、外圍を見巡、給へる事、由、御圍の地、お渡に第六十七段、委く云るを見、依、を、生坐、依、御孫子、大圍主、神、此、圍經營、固、給ふ時、少毘古那神、渡、來坐し、其功を祐、て、此、圍を作、廻り給ふ。此、第八十九段、と、第九十三段、まで、を見て、知るべし。其、間、大圍主、神の和魂、大物主、神、外圍、よ、渡坐し、多造、給ひ、少毘古那神、ま、外圍、よ、還、給ふ、依、後、大物主、神、御圍へ還、給ひ、て、荒魂と御力を、戮せて、御圍を經營、給ふ。第九十五段、第九十六段、斯、大圍主、神、十五柱の珍子、を、四方、外圍、よ、班遣して、經營、を、給ひ、依、おち、此、段、は、て、大圍主、神、現事、を、皇美麻、命、お、避奉、り、て、杵築、宮、お、長、よ、静坐して、後、少毘古那神の渡、坐る

常世^ト固^トよ。其御靈を分遣ち給^ル予^メ。其^レ共^ニく^ル外^ノ固^トを造^リ固^ト給^ルむ^ニむ^ニぬ^ルべ^シ。然^レして少^シ毘古那^ノ神^ノの御靈と共^ニふ。其御靈の還^ル來^リ給^ル予^メ。文德天皇御世。齊衡三年十一月よぞ有^ル依^ル。お此^ノ事^ヲ文德天皇紀よ見^エて第九十四^ノ斯^ノ段^ノの傳^ヲよ引^テ委^ク辨^ヘと^ルが如^シ。斯^ノて右^ノ此^ノ神^等此^ノ御靈共^ニく^ル御心を一^ツび力を合^セて外^ノ固^トを開^キ。其^ノ固^ノ人^等よ御靈幸^ハひて種^ノの事^々も始^メ志^ス終^スて。其^ノ多^ク悉^ク皇^ノ固^ヲよ貢^奉ら^ズ。皇美麻命^ノ事^ヲ依^リ。固^ト茂^ク治^メ賜^フ御^事此^ノ備^トとぞ爲^シ給^ルぬ^ル依^ル。此^ノ右^ノ注^ヲ説^ク等^ノの御世^ニよ大加羅^ノ固^ノより人^ヲ渡^リ來^ルま^スるを^モじ^テ仲^ノ哀^ノ天^ノ皇^ノ此^ノ御世^ニよ神^ノ功^ヲ皇^ノ后^ヲ韓^ノを征^シ從^ヘ給^ヒて^モじ^テ今^ニ至^ルまで外^ノ固^トより其^ノ固^ノ産^ノども多^ク持^リ來^ルて慕^ル寄^リ奉^ル有^ル状^ヲを見^通ちて思^ヒ辨^フべ^シ。然^レる^ニ外^ノ

固^トと^シ也^ト。參^リ渡^リ來^ル依^ル事物の中^ニよ善^ノのら^ニ怒^ル事物もま^ニ多加^ク依^ル外^ノ固^トは元^トと^シ神^ノ此^ノ生^シ坐^ルぬ^ラば^シ。淖^ノ沫^ノの凝^リ成^ルる^ニ固^トあ^リ依^ル故^ニよ。惡^ノ死^ノ事^々も多加^ク依^ル依^ルき理^{アル}ふ。此^ノ事^ハ九^ノ段^ノの傳^ヲよ委^ク況^シて皇美麻命^ノ御天降^ル此^ノ時^ニよ。經津主^ノ神^ノ建^ルく注^ヘへ^ル也^ト。況^シて皇美麻命^ノ御天降^ル此^ノ時^ニよ。經津主^ノ神^ノ建^ル御雷^ノ神^ノま^ニ天降^ル坐^シて。豫母都^ノ固^ノの穢^クふ因^テ成^トと^シ也^ト。伊豆速振^ノ惡^ノ神^ノと^チを皆^ク悉^ク。御固^ノ此^ノ地^ヲを逐^ヒ給^ヒし^ルは。其^ノ悉^ク外^ノ固^トよ往^ルむ^ニお^ト炳^シ。外^ノ固^ノの籍^等よい^ハどい^ハふ^ニ枉^クし^キ物^ノの^ハま^ニと^シ然^レま^ニ此^ノ神^ノと^チ此^ノ御魂^ノよ^ハ通^ルる^ニ也^ト。此^ノ神^等あ^リ依^ル。然^レま^ニ此^ノ神^ノと^チ此^ノ御魂^ノよ^ハ依^テ。人^ノ心^も非^ク志^ス。自然^ノ邪^ノあ^リ道^ノ惡^ノき法^{ども}も多加^ク依^ル事^ハ。然^レも有^ル依^ルき事^{アリ}。故^ニ種^ノ此^ノ事物を貢^奉る^ニふ^ハ

繼て彼神とちの心と起まる妖まがくしき法ほうども此傳つたへ
 來るよ屬なてまよ邪よこふ依た蕃神ばんじんもあはと渡わた來きてしうば其
 蕃神の心と人此心そまよ率すべ凝こて正ただしく豎たてよ行ゆ通とま依
 神道を嫌きらひて舊もとと正ただ齋いける神をおきて其蕃神を齋いき
 横よこふ他ほかと正ただ入い來きた依た法ほうを尊たぶ甚いじ死し枉が事じもぞ出來きよ
 け依た凡たて正ただしき神かみとは舊もとより皇國みくにの古傳ふるつたよ見みえて天
 いひ正ただしき道みちとハ天あま皇み祖み神かみとちの御言みことことばたまよ斎い來きまる神かみとちを
 し坐まちて豎たてよ通とまる道みち字あいふ邪よこある神かみとち天あま皇み祖み神かみ依
 此古傳ふるつたよ見みえ外ほか國くにとちめ參ま渡わたま依た神かみを云いふ邪よこの道
 とハ天あま皇み祖み神かみの道みちとち異ちがふ横よこさまよ理こと字あ立たる道みちくを
 凡たて云いふ他ほかとち横よこよ入い來きれる道みちあまるバ依たり是こ其こみ
 ぞ正ただ邪よこの字義あまよ正ただ邪よことふ言ことの本義ほんぎ依たる依たり是こ其こみ
 依た言こともて行ゆるむ彼か逐おちまるし神かみ此こ心こころあま加かし猶なほ末すえくふ

注ふを見
 依たるし。

四百

大國主神。讓坐綾門日女命出

時。女神不肯。逃隱出時。大神伺

求出處。於今云宇賀。亦娶朝山

坐眞玉著玉出邑日女命而每

朝通坐矣。故云朝山。此二柱神

者。竝神產巢日御祖命出御子

也。亦子八尋銚長依日子命。此

神出。詔吾御心平明不憤出地

云生馬。亦子薦枕志都沼值命。

亦名天津枳值。此神出坐鄉云
可美高日子命。此神出坐鄉云
漆沼。即有正倉。亦子支佐貝比

賣命。亦子宇武賀比比賣命。此

神化法吉鳥而飛度鎮坐出處

云法吉。亦子天活玉命。亦云伊
久魂命。

コハ 平ツカヒノムラジオムチノカニヌシラガカヤ
此者猪使連。恩智神主等出祖

也。亦子天三降命。此者豊豆国宇

佐国造出祖也。

綾門比賣命。御名比義未考得。大綾津日神の綾ハ禍の
也。其義ハ有レケラズ。本書一本。○讀ハ用婆比と訓ベ
シ。字書ハ讀ハ讀を同字よ。順言謔弄曰讀。タルハ有レ。此
義ハ依レ依レ。されど婚の言義ハ既ハ注ヘ。第九
下ニ依レ。○不肯ハ。宇倍那波受と訓。聽入給
ぬを云。○宇賀ハ。本書風土記ハ。出雲郡宇賀郷。郡家正北
一十七里廿五步云くと。採まる本文あり。和名
抄ハも見え。○風土記抄ハ。以口奥宇賀。為本郷。并東南
宇賀郷也と。○眞竜解ハ。此神と下ある玉之。風土記
邑日女命を同神と云。いみじき非言。同郡ハ。在神祇官
宇加神社と。眞玉著玉之邑日女命。眞玉著
玉之ハ。玉をふ言を重。玉比群ぐる。と係。稱。とる發
語。よ。邑日女と申。案の御名を聞え。と。眞玉著ハ。
緒と。朝山ハ。風土記ハ。神門郡朝山郷。郡家東南
冠辞あり。

緒と。朝山ハ。風土記ハ。神門郡朝山郷。郡家東南
冠辞あり。

吾御心平明不憤詔故云生馬とあり。風土記抄より東西生

屋比津下佐田等之地也といへり。伊加麻斯加良受を詔へ依り依まざる地

名あまむ。伊加麻と云はきを誤りて伊古麻と云るれり。

和名抄よも生馬と見えたり。けして同郡。在神祇官といふ依社の中。

生馬社あり。抄よ。記於長依日。神名式よ。生馬神社とあり。

是あり。風土記よ。はと不在神祇官とある社此中よも生

馬社あり。抄よ。西生馬村大岩。大明神也と云也。○薦枕志都沼值命。薦枕ハ

静寢と係と依發語あり。此發語のこをち第一段の沼を

まれをち寢あるべし。又若くハ主ふて静主。値を例の

男神多稱ある言う。○天津枳値可美高日子命。枳値可美

此義未思得。真竜ハ枳値を城築ツキの約チあり。可美を神と云すまど當まりとも聞えぬ。○

漆沼ハ風土記よ。出雲郡漆沼郷。郡家正東五里二百七十

歩。神魂命御子云く。故云志司沼。即有正倉と見

也。本の云くと約するを。即和名抄よも漆沼と作也。風土

記抄よ。以上下直江村為。けして風土記。神名式ともよ。同郡よ。此

漆沼郷也といへり。神の祠あらむを思ふを。未見當らば。○支佐貝比賣命。宇

武賀比比賣命。二柱此ことを既よ出と也。第八十一段の

○法吉島ハ真龍説よ。風土記抄よ。法吉郷合法吉春日末

次爲一郷。宇武賀比比賣命度坐所者。法吉村中。宇久比須谷

也と云也。然れど法吉を富く伎と訓て。鶯のおやく知ら

依。彼が轉マカをもて名よ負オウせとるれ也。と云依が如し。古今集物名よ。藤原敏行朝臣。心のら花の雫シヅクよそ布ぢ抄く。宇具比須ウキヒスと此み鳥の鳴らむ。と有を思牙ば。宇具比須と云名も。鳴音小依て負オヒと依あ也。和名抄よ。陸詞切韻云。鶯ウ春宇久比須也。見え。万葉集よ。鶯ウ字を書とれども當らざるを。古死事識人とち既小辨へて。宇具比須也云鳥加よ。うく小漢土りた。詳小知らまざる鳥ある由云へり。まよ春鳥とも。黄鳥とも書けど。是もとく當まゆとを思まは。けて此比賣神の。此鳥よ化て。飛渡りて法吉郷小靜坐シヅカる事也。いのふ依由とも今知ぼらば。末よ櫛八玉命の鶯ウ鳥と化まるれぞを。其故とし詳あるを。此神の事此知らまざるを口をし。後人とく考へてを。決免て幽き由ある也。○法吉ホウキは。風土記よ。嶋根郡法吉郷。郡家正西一十四里。

卅歩云くとあ也。和名抄よも。法吉と書り。けて在神祇官とある社也。

中よ。法吉社あり。抄よ。祭宇武加比比賣命。法吉郷大森大神也といへり。神名式よ。法

吉神社とあ依是あ也。○天活玉命。御名此義十種神寶の

中よ。生玉足玉あり。此生玉の意小稱とるあらむ。三島ミ耳命の女よ。活玉依毘賣といふも。神武天皇卷よ見えと也。○猪使連ハ。神代本紀よ。生

魂命猪使連等祖とあ也。天神本紀よ。天活玉命。新田部

直等祖とも見えと也。猪使といふ姓他小所見。○恩智神

主也。姓氏録和泉国天神小。恩智神主高魂命兒伊久魂命

之後也とあ也。恩智と也。神名式よ。河内国高安郡よ。恩智

神社二座。並名神大月。をある社を云。此社の神主此祖と

次相嘗新嘗。

依由あり。此社の事ハ、第三百三十四
 段此傳ニ委ク注ベシ。○天三降命名義未考
 得交。神代本紀ハ、天八下等とあるニ、此神
 名ヨ因テ、安ヨ作レル神名を見たり。○豊国ハ、既ヨ
 出トシ。第八段の傳見ベシ。○宇佐、国をト、豊前、国、宇佐郡をいふ。天
 神本紀ヨ、天三降命、豊国、宇佐、国造等祖と見え、国造本紀
 ヲ、宇佐、国造、檀原朝高魂尊孫、宇佐都彦命、定賜、国造とあ
 べ。あ不此、国造のことハ、神武天皇、卷ヨ委ク注ふを見ベシ。勿不此外ヨ、神名式ヨ、出
 雲郡杵築大社此次ヨ、同社神魂御子神社と云る也。其御
 名ヲ知法ウラズ。

故其支佐貝比賣命爲將生佐

太大神
タノオホカミヲ
 亦云獲田毘古大神時
マタマラスサダビコノオホカミトトキニ
 亦名大土出御祖神時
マタノミナハオホツチノミヤノカミ

弓箭失坐矣爾時御祖支佐貝

比賣命吾御子麻須羅神出子

坐則所出弓箭出來願給矣

爾時角弓箭隨水流出來爾時

アレシシ_三コノリタマハクコハアラズユミヤニ
生坐出御子詔曰。此者非弓箭

トノリタマヒテナゲウテタマヒキマタカネノユミヤナガレイデ
也。詔而擲廢出。又金弓箭流出

キツスナハチマチトリソヲマシテクラキイハヤナカモトノリタマヒ
來。即待取出坐而。閻岩屋哉詔

テイトホシタマヒシトキニテリカカヤケリカレソ
而。射通出時。光加加明也。故其

コライフカカトカガノサトカガノカムザキコレ
處云。加加。加賀郷。加賀神埼是

ナリサダノオホカミノトコロマスナリスナハチミ
也。佐太大神出所坐也。即御祖

キサガヒヒメノミロトノヤシロマスココニイマノ
支佐貝比賣命出社坐。此處。今

ヒトユクコノイハヤノホトリヲトキハカナラズコエトッロコシ
人行。此窟屋邊出時。必聲確確

テユクモシヒソカニユケバカミアラハレテツムジカゼオコリ
而行。若密行則。神現而。飄風起。

ユクフネハカナラズクツガヘル
行船者必覆也。

佐太大神。眞龍云。佐太ハ地名あり。意宇郡の文。狹田圀
を何。御名ハ地をもて稱申せむ。案此御名ハ知グとし。
熊野大神能義大神宇沙都比古。○猿田毘古大神。猿田を
宇沙都比賣おど申比グごとし。○猿田毘古大神。猿田を
佐田と訓比し。猿を古ハ佐と比みも云。し故。借て書
比を見也。猿と猿ハ其は和名抄。下總圀の郡名。猿嶋
佐之萬を何。神名式。參河圀賀茂郡狹投神社を同圀
本圀帳。坐加茂郡正一位猿投大明神と見也。今も猿投
在てサナギともサナゲとも云あり。然まむ古く猿を佐おも云るおも炳
し。故借て書るぬらむ。然るを古くも猿字の借字あり。こ
を思ハざ。しと聞えて。神代紀下。此神ハ容貌を口

尻明耀云くと。猿の状よ見也。比く書れしを甚じき非お
ゆおと。既よ辨。とるが如し。第百三十六段の。ちて此神や
がて佐太大神あり。由を。比古てふ言比有無のみ比
違よて。全く同じ御名あり。其を出雲風土記。三所。佐
太大神と記し。神代紀。猿田彦大神とみおのら名告ま
し。古語拾遺。古事記。も皇美麻命の御詔。猿田毘古大
神と詔へ。然まバ此ハ尋常。大神を申比とを異。比る。
刺圀大神。おぞ比類。元々大神と申べき由ありて。負
賜ひらむ。是同神あり。一證あり。○大
土之御祖神と申比御名の意を。既よ注。比。ちて此大土

神やぐて猿田毘古大神ある由は伊勢國度會郡宇治山
田地地主神と稱して祭れ依よ。此事も安でよ第七十四段の傳よ云へり、お不神
武天皇卷の傳 猿田毘古神後小天照大御神を伊勢の狭
長田伊須受之川上よ到坐むと云ひて御自ハ伊勢國よ
鎮坐るよ符此事を第百三十六段第百四十段第はと
其御孫大田命と云を宇治土公氏をいひ此命垂仁天皇
此御世よ天照大御神を伊勢國宇治地よ待受奉るお
ぞを合せ考りて知らる。猶その處くふ注を見と。○弓箭
失坐矣ウセマシキおを弓箭失矣ウセマシキと有べきを失坐矣ウセマシキとあるを思ふ
よ。此弓箭ハ御父神の御靈寶と齋賜へ依弓箭を聞えと

巴。三輪大物主神此御魂の丹塗矢よ化て活玉依比賣を
妊ませ火雷命の御魂此こまも丹塗矢よ化て玉依日
女を孕ませとるあ斯て其御父神ハ大歳神あり其を大
土御祖神猿田毘古神亦云佐同神あると上よも下よ
め注如くよて大土御祖神ハ大歳神の御子ぬるよと既
小見と依如くおまむあ巴。第七十四段見るべし猿田毘
人の知ざ巴しハ大土神と同神古大神の御祖を今まで都よ
あることを知ざるよ依てあり。○麻須羅神之子坐則と
は麻須羅を正心マハラふて生依御子正心男お依神お坐む
を詔へる巴。あの麻須羅神を父神よ○願給矣ハ即神
小宇氣比給するあ巴誓此事ハ既小上よ注する巴。第三
段の傳見 ○弓箭とを角弭ツクノユミヤの弓箭お依げし。景行天皇
依べし。卷よ記せ

る角弭、弓をもち、堅魚を釣
とる故事あり、思合申べし。○此者非弓箭とは、角弭此弓
箭のいや、志死多。譬と依御言、凡也。○金弓箭を、鐵弭の
弓矢を依、任せて加泥を云、金、鏤此、こせあるよ、金字
常あり、常陸風土記香嶋郡、此下よ、鐵弓二張、鐵箭二具と
見也。○待取之と、流來るを、遲しと待取、給ふあ也。○射
通ハ、岩屋をあ也。○光加く明也ハ、氏理加く夜、理と訓
也。○故云、加くは、光加く明る故よ、號と依由あり。○加
賀郷ハ、本書風土記よ、嶋根郡加賀郷、郡家西北二十四里
一百六十步、佐太大神所坐也と、何也。抄よ、加賀浦、大蘆津
抄よ、加賀とあ也。○加賀神埼も、同記同郡よ、加賀神埼、即有窟、高

一十丈許、周、五百二步、東西北通、所謂佐太大神之也、何也。

此、埼ハ郷の北よ在て、窟ハ今も、佐太大神の生坐る處也。

云ひ傳ふぞ。黒沢正恒と云人の大社記といふ物よ、窟
櫓、梶おく、行、こと速あり、數十間往て、東西小拔、穴あり、
俗是字、潜門をいふ、窟中よ、て仰ぎて見ま、乳房の形、
ゆて、水瀦る、おと絶、此海中の草、此乳味よ、潤ひを受く、
依よ、をゆて、其味、他方の草より、旨しと云、ま、此浦、此女
を、皆、う、あら、左、此、乳房、大、ある、を、此、窟、此、乳房、も、左、大、
依、の、故、ゆ、め、岩、間、の、水、此、滴、る、色、岸、う、於、波、此、ひ、
み、こ、多、へ、百、千、此、雷、純、如、し、人、の、物、言、色、も、詳、あら、
ま、ま、山、彦、よ、あ、と、へ、て、夥、し、棹、此、哥、を、哥、牙、む、十、人、此、色、
千、万、人、の、あ、あ、り、聞、也、窟、を、出、て、見、ま、を、岸、上、よ、馬、の、足、跡、
あり、此、を、大、神、此、竜、馬、を、乘、上、給、ひ、し、処、あり、と、云、磯、此、岩、
上、よ、馬、槽、あり、所、此、人、語、る、ハ、此、浦、を、加、く、と、云、り、起、
上、て、今、世、まで、母、を、加、く、と、云、れ、と、語、る、此、神、窟、よ、正、加、賀、
浦、牙、半、里、加、賀、と、り、水、浦、牙、海、上、一、里、あり、隱、岐、固、め、石、見、
写、も、間、近、く、見、也、細、川、云、旨、法、印、の、狂、哥、よ、哀、よ、も、い、ま、ど

乳を吞む海土の子此加のあよりや放まざるらむと訓ましと云り谷川士清此和訓菜も衆妙集よ出雲國仁保の浦近き加くと云所此渙人此家ふとまりて哀もいまだ乳を吞む云くをふ哥を何ばて加賀此潜戸とて海中よ山あて岩屋此中よ眞水多出入是多乳水を云へりほと大社此神の乳石とも云りと何正衆妙集とは玄旨法印の集あり加くの説を云よも足後とふるくか協諺も有しと見也 ○佐太大神所

坐也ぞを眞龍解ふ佐太社地也秋鹿郡の東塚加賀ハ嶋根郡此西塚よ屬て共よ大神此敷坐地おまむ大神所坐也と書と正と云正其社地ハ同郡よ神名火山郡家東北九里卅歩高二百卅丈周一十四里所謂佐太大神社即在此彼山下也と見也抄よ神名火山之麓者所秋鹿郡よ在神祇官を何る社の中よ佐太御子社を何は是あ正抄よ佐田三社

其一社伊佐奈枳乃麻奈子熊野加武呂命一社神魂命御子枳佐加比賣命佐太大神一社迹枳命伊佐奈弥命天照大神也神名式よは佐陀大神社と何正今本大字をと見えたり神名式よは佐陀大神社と何正脱せめ古本よ依て補へ正固史よ貞観元年七月十一日出雲國從五位下佐陀神授正五位下同九年四月八日正五位下佐陀神正五位上同十三年十一月十日佐陀神從四位下おど見也杵築大社記お佐太社佐太山の麓よあり八十八員準人と云あり是を先驅者ありま社此前二町むりお田中社何ゆ天鈿女命何と云正田中社ハ風土記よも見えて抄よ佐田宮内田中大神祭猿田彦命といへ正何ふても佐太大神の猿田毘古大神あるよ由あり此社のおをを猶末よ注し第百二十三段杵築宮 ○支佐貝比賣命之社は風土記嶋根郡よ在神祇官とあは社此中よ加賀社を何は是あ正抄よ加賀郷自灘磯神崎窟陸地謂窟戸大神神名式よ加賀神社をあり今も加賀の潜神也といへり

○今人云く。眞龍云。此風土記の成まる天平此時の人も。昔此傳、お依て、此窟^{ツクリ}此邊^{アタリ}行く時を。必聲^{ナゲ}確^{トコロ}磕^{コト}志^スて行^{ユク}と記^スは。其^レをゆ千年餘を經て。今人も此所を船^{フネ}乘^{ノリ}はる時を。聲^{ナゲ}を^{ナゲ}ろくして行^{ユク}れ^トと云^フ。

○門人曾我常昌。及び田口慶成。田口慶秀ら云ふ。此卷を上木志て。世お弘むる者は。美濃、固加茂郡越原村小住居る越原正蒿。まゝ同村ある。五斗信興。桂川盛苗らある。彼初卷よ^レ次^ニを。刊行し^テ人^トに^レ。力の添^ヒるは。上^ニ此卷と小同じ。かゝて十七よ^レ此卷までを。第五秩とい^フ。

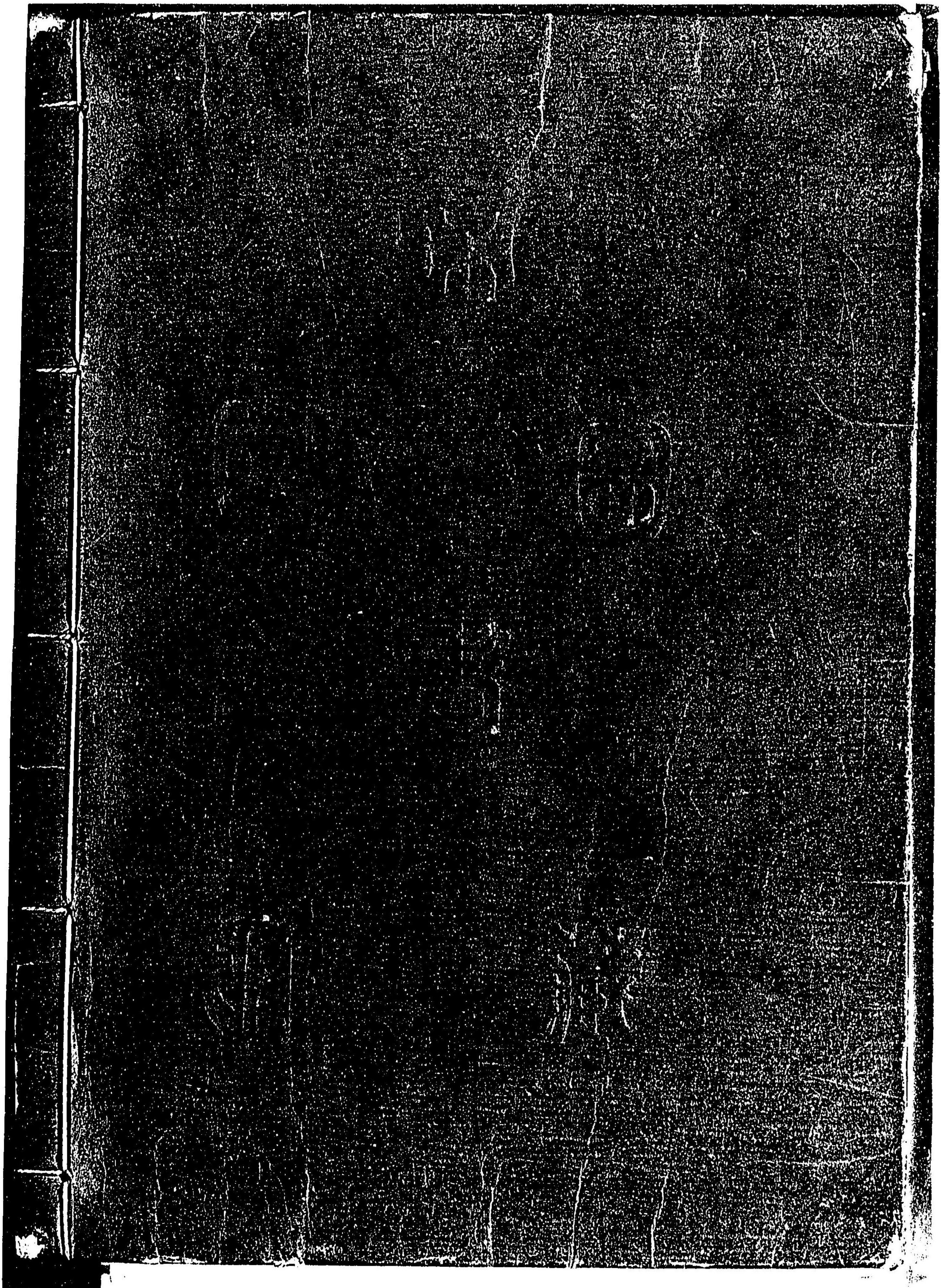
彫工 木邨房義

伊吹迺屋先生及門人著述刻成之書目 塾藏版

- 古史成文 神代部 三卷 ○古史徵 神代部六冊 關題記五冊 十一卷
- 古史傳 自初卷至 北八卷 七秩刻成 ○古史本辭經 五十音 義訣 四卷
- 神代系圖 折本 拾入 一帖 ○同 小折本 一帖 ○同 挂軸料 一枚
- 靈能眞柱 二卷 ○神拜詞記 折本 一帖 ○玉多須喜 二 帙 十卷
- 太元圖說 石指 一幅 ○古語拾遺校訂 一卷 ○万聲大統譜 一幅
- 祝詞式正訓 二卷 ○神字日文傳 疑字 篇附 三卷 ○度制考 二卷
- 弘仁歷運記考 二卷 ○大祓詞正訓 折本 一帖 ○古史年歷編畧 一帖
- 天津祝詞考 一卷 ○鬼神新論 一卷 ○學神号 石指 一幅
- 春秋命歷序考 二卷 ○入學問答 附著述 書目 一卷 ○大扶桑固考 二卷
- 赤縣太古傳 初 帙 三卷 ○赤縣太古傳成文 一卷 ○三五本固考 二卷

○三神山餘考	一卷	○古今妖魅考	三卷	○古道大意	<small>講本</small> 二卷
○俗神道辨	<small>講本</small> 四卷	○靜乃石屋	<small>同</small> 二卷	○西籍慨論	<small>同</small> 三卷
○出定笑語	<small>講本附錄</small> 凡六卷	○伊吹於呂志	<small>同</small> 二卷	○悟道辨	<small>同</small> 二卷
○牛頭天王曆神辨	一卷	○童蒙入學門	一卷	○三易由來記	二卷
○鑿宗仲景考	一卷	○太界古易成文	一卷	○太界古曆成文	一卷
○大道或問	一卷	○皇典文彙	三卷	○赤縣歷代尺圖	一枚
○古學二千文	<small>誦例付</small> 一卷	○古易大象經正文	一卷	○說文解字序	一卷
○宮比神御傳記	<small>御影付</small> 一卷	○天滿宮御傳記略	二卷	○日女島考	一卷
○古道訓蒙頌	一卷	○神德畧述頌	一卷	○叶古要略	一卷
○荷田翁啓文	一卷	○草木撰種錄	一枚	○魂魄分屬圖	<small>石摺</small> 一幅
○祭典略	<small>祭文例附</small> 一卷	○千字文	一卷	○諸職祖神号	<small>石摺</small> 數種
○神字原五十音	一枚	○皇祖宮所考	一卷	○故大人遺訓措物	數種

115
34
111



175
34
///

古史傳

二十